

41468
 教科書文庫
 4
 810
 41-1938
 20030
 1691



375.9
 T610
 資料室

新制國語讀本 卷十
 新教授要目準據



375.9
To 18

日一月二年三十和昭
濟定檢省部文
用科語國校學業實科文漢語國校學中

學習院教授 東條操編

新制國語讀本 卷十

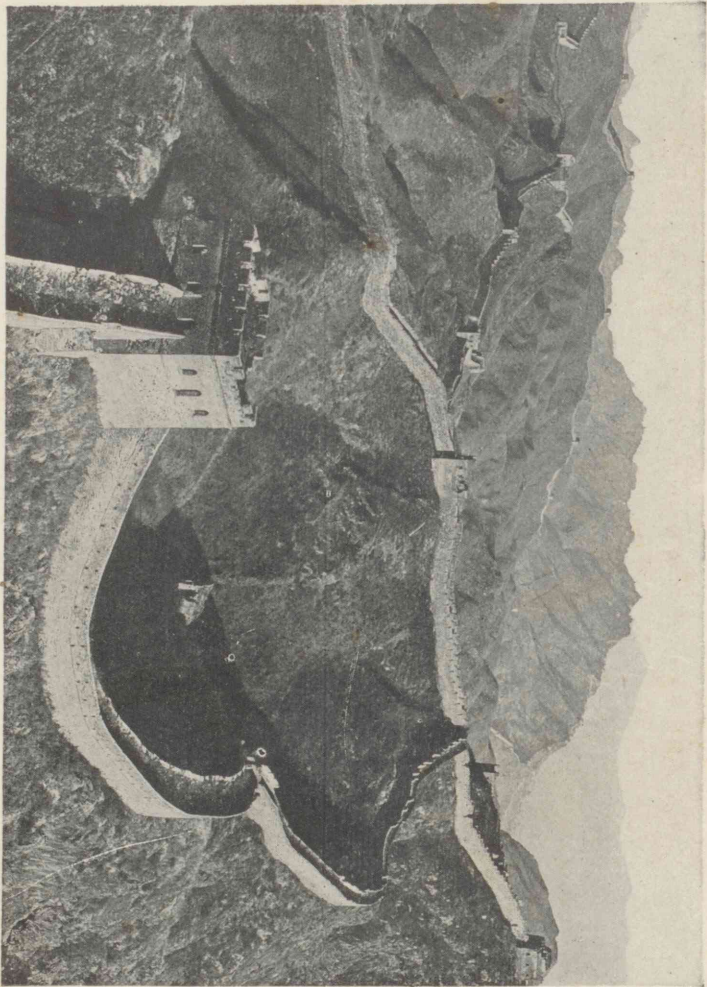
新教授要目準據

東京 三省堂
大阪

Handwritten notes in the top left corner of the left page.

東京 三省堂
大阪

三省堂



萬里長城の第三課參照

廣島大學圖書印



卷十 目次

一 日本的自覺	高須芳次郎	一
二 大丈夫の覺悟	幸田露伴	一一
三 萬里長城(抄)	土井晩翠	一六
四 國家の盛衰	大町桂月	二二
五 世界平和への貢獻	山川端夫	三二
六 雅文抄		
一 萩をめぐる詞	清水濱臣	三六
二 掃衣を聞く		三八

三	漁父辭	三八
四	初雁を聞く辭	三九
五	雪をめづる記	四二
七	我が國の繪畫	四五
八	科學者と藝術家	五二
九	訓抄	五二
一〇	月は世々の形見	六三
一一	光あれ	六八
一二	須磨の秋	七三
一三	源氏物語論	七九
一四	徒然草抄	八二
	吉田兼好	八八
	本居宣長	八二
	紫式部	七九
	姉崎嘲風	七三
	室鳩巢	六八
	吉村冬彦	五二
	藤岡作太郎	四五
	村田春海	四二
	加藤千蔭	三九

一	萬事は皆非なり	八八
二	大事を思ひ立たむ人	九〇
三	寸陰をしむ人なし	九一
四	さしたる事なくて	九二
一五	行と觀	九三
一六	船旅	一〇〇
一七	七月草の花	一〇八
一八	松の落葉	一一四
	一ものしりびと	一一四
	二ものまなび	一一五
	三論語	一二六
	安倍能成	九三
	紀貫之	一〇〇
	(増鏡)	一〇八
	藤井高尙	一一四

一九 萬葉集序説
 二〇 瀧の都
 二一 古事記と國家的精神
 二三 須賀宮
 二三 肇國の理想
 二四 上古の文學

佐佐木信綱

佐佐木信綱

一一八

二〇 瀧の都

(萬葉集)

一二四

二一 古事記と國家的精神

久松潛一

一二八

二三 須賀宮

(古事記)

一三五

二三 肇國の理想

中村孝也

一三八

二四 上古の文學

一四六

— 目次 終 —



高須芳次郎
號は梅溪。評論家。大阪市の人。明治十三年生。

新制國語讀本 卷十

一 日本的自覺

高須芳次郎

現代の思想界は今や一大轉換期に入つた。言ひ換へれば、日本が自ら進んで世界に於ける思想界の大混亂を整理し、統一しなければならぬ秋となつた。この意味から、^{精神文化のハネ}光は東方よりといふ言葉に對して、「光は日本より」と言ひたい。

今日、西洋の學問を尊重する人々は、日本には何等独自の思想がない、哲學がない、文化もないといふ風に速斷する。果して日本には独自の思想がないか。独自の哲學がないか。將又独自の文化がないか。

宇宙觀

森羅萬象

一體東洋文化の基調と西洋文化の基調とは自ら異つてゐる。東洋では調和ハモニの美を尊ぶ。その主因は、すべて文化の要素を宇宙觀から想ひついでゐるのであつて、宇宙の森羅萬象は肉眼で見たところ、上下あり、高低あり、大小あり、種々變化錯綜してゐるが、根本的に見ると、調和に歸するのである。自然界では、地震の如き、大暴風雨の如き、驟雨の如き動的争闘情態を呈する場合もあるが、それらの破壊作用は、その目的とするところ、やはり調和にある。調和のための争闘であり、調和のための動搖である。結局、宇宙の眞相はどこまでも調和に存するとする。それゆゑ、支那では天といふことを西洋のゴッド以上に崇敬するのだ。静夜、蒼茫たる天を仰げば、星辰が燦爛としてダイヤモンドを鑲めたやうに輝き、白日、空を望めば、光の女神たる太陽が麗しい光線を八方に射かけてゐる。それと共に風雨寒暑の差別も生じて、四季が推移してゆく。それ

則天去私

綜合的
歸納的

唯
物
唯
心

らばすべて天の作用で、天の上に大いなる調和が現れてゐるといふ意味に於て、天を崇敬するのが東洋人の常習だ。「則天去私」といふことは、東洋獨得の精神であり、東洋哲學の一大基調をなすものである。この點に於て、日本も支那もほぼ同一で、すなはち文化の基調は共に調和の上にある。調和は統一的綜合的歸納的での分析を主とする西洋文明とは根本的に色合を異にする。西洋に於てはすべての事體を分析して、その極微に至らねばやまない。例へば、國家に對する場合、西洋では、これら进行分析して個人に至るのであるが、日本や支那では、個人から國家に歸着するといふ風に、綜合的な態度をとる。かういふ點が東洋文明の西洋文明に異なる所以である。

既に調和を以て特長とする日本思想は、現代の西洋の如く唯物に偏せず、又印度の如く唯心に偏せず、物心を綜合して圓融自在な

る境地を目指してゐる。随つて日本哲學の一つの特長は、唯心の
みを強調せず、又唯物のみを力説せず、この二つの長所を綜合した
中正の道、即ち圓融自在なる超越的境地にある。言ひ換へると、唯
物に即するが如くにして唯物を超越し、唯心に即するが如くにし
て唯心を超越し、唯物唯心の二境を越えて、更に一段高い根本原理、
即ち「まこと」といふ物心一如の境地を支配するところに立つ。そ
れを平たく言へば、天に則ると言ふことが出来よう。即ち一切の
私を去つて、公平無私の天の道につくといふことが、東洋人の心で
あり、同時に日本人の心である。日本哲學の源流は、かういふとこ
ろに一つの根を据ゑてゐる。

然らば、さういふ思想を組織づけ、體系づけた哲學が日本にある
かどうか。日本人は西洋人のやうに、分析に得意でない、また、組織

唯心の道に
かちひるは祈
りとも神や

言舉せぬ國
「葦原の瑞穂の國
は神ながら言舉
せぬ國。」
(柿本人麿、萬
葉集)

體系に長けてゐない。したがつて古來、日本人の間には、今日西洋
流にいふ哲學なるものは、或は無いかも知れぬ。

わが古典に、日本を言舉せぬ國と言つた。「言舉せぬ」とは、つまり
言説上、組織體系をもたぬといふことである。或は空理空論せず、
道の實行を主とするといふ意味にもとれよう。蓋し日本人は、道
徳上、言ふことよりも、先づ行ふことを尙び、自ら哲學宗教を組織す
るよりも、他の哲學宗教の長所を採り入れ、それを調和の形に於て
現すといふ上に、世界無類の能力を發現し來つた。現在に於ても、
やはりさういふ統化力を充分に持つてゐる。

支那に於て發達した儒教は、今日支那では全く衰へたが、獨りそ
の精神は日本に遺つてゐる。佛教は元來印度に發生し、支那を經
て日本に傳はつたが、それも今日は印度支那に衰へ、ひとり日本に
その精神を留めてゐる。更に基督教は歐米から日本へ傳へられ

たが、或意味に於て、基督の精神は寧ろ日本に存してゐると言つてもよいからである。それら宗教ばかりでなく、世界各國の文化は悉く海を越えて極東の島國たる日本に集中し、最後に日本の力に依つて把持せられ、整理せられるのが常だ。何故かといふに、日本人が調和といふことを重んじて、あらゆる文化を調和鹽梅し、それを日本化して一層光彩あらしむべき無比の能力を有するからである。

更に日本哲學の源流として第二に挙げなければならぬ一要素は、自然の人情を重んずることである。人情の發現は、所謂國學者の「眞心」に根を置いてゐると思ふ。即ち感情の上で少しも偽ることなく、又少しも矯めることなく、自然の儘に眞情を流露する。人に對するときは、その相手に眞情を傾ける、動物に對するときは、動物に眞情を注ぐ。天地自然に對しても亦情の眞實を盡すといふ

のが特色である。これが一步進むと、天真爛漫の境地に達し、丁度櫻の花がばつと咲いてばつと散るやうな、自然の趣と一如になつた心境に入る。本居宣長はそれをもの「あはれ」と言つた。「ものあはれ」を知ることには人情の極致である。「ものあはれ」には理窟がない、分析解剖がない。具體的綜合的である、また直覺的直感的である。平家物語が今日も尙我々の心を深く打つ所以は、人情の機微が能く現れてゐるからである。彼等衰亡に瀕した平家の人々には、何等の哲學も何等の宗教もなく、又何等目ざましい理性の働きもなかつたが、獨り人情味の發露に於て萬人を動かさず、やまなしいものを發揮した。即ちもの「あはれ」が平家物語の中心をなしてゐるのだ。ところが、西洋人は人情よりも、より多く理性を尙び、その極、何事も理窟を以て解決しなければやまぬ。理窟に加ふるに理窟を以てする。それは西洋人の一大長所であると共

に一大短所である。彼等が實驗を重んじ、實證を尙び、何事をも分析解剖しなければやまぬのは、以上の如き傾向に根ざしてゐる爲である。

極言すれば、西洋の考へ方はとかく調和を破壊する方に傾き易く、動もすれば理窟に捉はれ過ぎる爲、非人情になり、非人情の結果は、個人的となり、勢ひ利己主義に流れ易い。この傾向は上下を一貫し、何事も權利義務で解決しようとすることになる。そのため調和を破ることが益、はげしく、結局、孟子の所謂、上下交、利を征りて國危し。といふ情勢となる。

現代の日本人は、動もすれば日本自身の特色たる調和の哲學を忘れて、却つて調和を破る西洋の文化に隨喜し、極端から極端に走る西洋の學説を、何等の批判無く受容れる弊に墮してゐる。若し日本人が祖先以來調和の精神を以て外來文化を統制し、外來思想

上下交、利を征りて云々
「王曰、何以利吾國、大夫曰、何以利吾家、士庶人曰、何以利吾身、上下交、利、而國危矣。」
（孟子、梁惠王上）

嚴正な批判

獨立不羈

禮讚

を巧に支配した世界無比の消化力あることを自覺するならば、日本の立脚地から外來思想の上に嚴正な批判を下して、取るべきは取り、捨つべきは捨てねばならぬ。「吾人は日本人なり。」といふ思想の上に、獨立不羈の精神を持つことが何より必要である。

諸君、今日の時勢を何と觀るか。今や行きづまれる西洋文明は、何等かの解決を得なければならぬ。久しい間文明的優越を誇つた歐洲は、今や自己の作りあげた文明に自ら縛られて、どうにも身動きが出来ないのである。かくの如き有様に對して、更に來るべき新文明の曉の鐘をつき鳴らし、東の空にはほくくと創造的文明の太陽を仰ぐべき道を切り開くのは、日本を除いて他に何國があるか。日本こそは東洋文明のあらゆる長所を助長し且保有してゐる。支那、印度を禮讚するものは、その古代文化を稱揚するけれど、それらは今日、皆日本の力で生命を持續してゐるのだ。即ち日

再評價

本あつての東洋で、東洋あつての日本ではない。日本人の優越な同化力に依つて、東洋文明の命脈が維持されて來たのであると共に、今や多年閉却された東洋文明の上に、新しい再評價が加へられんとしつゝあるのだ。即ち東洋文明の新清算を始める時代に入つてゐるのだ。

要するに現代は日本が多年に互る西洋崇拜乃至歐化主義の病弊を一掃し、正しい日本の自覺の下に、新文明を創造してゆくべき時代になつたのである。即ち世界史上新しいエポックを劃する日本時代がまさに來たのである。

エポック

(光は日本よりに據る)

幸田露伴

名は成行。文學博士。文學者。東京市の人。慶應三年(一五七)生。

大海の百川を呑む

「百川學海而至于海。」
(揚子方言)

二 大丈夫の覺悟

幸田露伴

大丈夫、苟も身を學藝に委ねんとせば、まづ受發の二途に於て大丈夫の覺悟あるを要す。發とは外に内の發するなり。受とは内の外に受くるなり。受くることは須らく大海の百川を呑むが如くなるべし、發することは宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多からざらんことを嫌ひて、川の太、川の小を嫌はず、發することの豊ならざらんことを恐れて、方の東、方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふところあり、發するに問ふところあるは、兒女の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一。受をよくすれば、發は其の中に在り。大賢は能く受く、中才は勉めて克

く受く、賤人は好んで受くるあり、敢て受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらんを期する、之を眞に身を學藝に委ぬといふ。受の途に於て工夫刻苦するものは、學藝を成すに庶幾からん。受の途に於て大丈夫の覺悟なきものは、爲すにだに堪へざらんとす。何ぞ成ることあらん。

批評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し、褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。是に於て、毀譽褒貶の我が頭上に加へらるるや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒らに懼れ、或は徒らに驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜しむべし堂々たる六尺の身、他人に簸弄せられたるを悟らず。人を颯風にし、我を糝糠にす。實に自ら待つの薄きのみならず、抑、また學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈此の如くなるべけんや。

それ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑む、清も亦辭せず、濁

批毀
弄

擊壤の歌

「日出兮而耕、日入兮而息、鑿井而飲、耕田而食、帝力奚在、於我。」

(帝王世紀)

舜の詩

「南風之薰兮、可以解吾民之愠兮。南風之時兮、可以阜吾民之財兮。」

(孔子家語)

も亦辭せず、日に黙々たり、洋々たり、而して漸く我が大を成し、徐に我が大を用ひ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の人の言を受くる亦此の如し。精雜密疎の説、毀譽褒貶の評、皆一齊に之を受けて擇ばず、我をして日に進ましむるあらんことを願はざる無し。古人まことに此の如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。擊壤の歌は誰か堯の徳を傷つくるものとなさん。舜の詩猶存すれども、誹謗の木の文は今何處にかある。

「此の故に、學藝に志ある者は能く外に受くる大賢の如くなる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。縦令滿面の詬辱、堪へんとして堪ふる能はず、筋張り血涌き、劍を抜いて直ちに報いんと欲するに至るとも、亦先づ牙關を咬定して、隱忍し、頭を垂れ、心を虚

牛渡馬ウマワタリ 劫ウツ しくする工夫の裏より一天地を拓き得て笑つて立つて謝して牛渡馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期すべし。之を大丈夫の受の覺悟といふ。

人貶すれば便ち受けずして胡言亂説し人讚すれば便ち默受して欣々たる如きは閨閣の兒女に在つては咎むべくもなし學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとなす。古に曰く峻谷に入るものは當に葛藟を攀ちて以て顛墜を免るべし時俗に處るものは當に道義に據りてしかして後もつて自立するを得べし。と。學藝に遊ぶものは當に反求の功に頼るべし漸く深造するあらん。たゞ反求の功に頼る則ち揚げらるゝも自滿せず抑へらるれば愈奮ふに足らん。

徐子曰く今それ身を立つる人の譽むる所とならずして人の謗る所となるものは未だ善をなす理を盡さざればなり。善をなす

峻谷に云々
「攬葛藟而授
予谷。眷峻谷
曰勿墜。」
(幽通賦)

徐子
名は幹、字は偉
長。後漢の末、
魏の初の人。

五十にして云々
「蓬伯玉、年至五
十、知四十九年
之非。」
(淮南子)

子思
名は伋。孔子の
孫。

理を盡すものは將に舜の若くならんとす。舜と同じからずと雖も、それ敢て之を謗るものあらんや。故に語に稱す「寒を救ふは衾を重ぬるに若くはなし、謗を止むるは身を修むるに如くはなし。」と。善いかな言や、能く大丈夫の覺悟を説けりといふべし。古人五十にして四十九を非とす。今我、昨の我を是として後の我に望むなくんば、我の死するや久しからん。

大丈夫まさに受發の二途に於て、大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡すあるべし。子思曰く、能く其の心に勝つ、人に勝つに於て何かあらん。能く其の心に勝たず、人に勝つを如何せん。と。爲す所ありて美とせられず、内に求めずして人に責むる、其の情は憫むべし、其の爲は悲しむべし。我豈、人の勝つを好むを陋とするのみならんや、我また、實に之を愧づ。傲はんかな海や、百川それ海を如何せん。

(調言)

土井晩翠

名は林吉。第二高等學校名譽教授。仙臺市の人。明治四年生。

萬里長城

支那古代に在つた防塞。西は臨朐から起り東は遼東に達する。秦の始皇帝、匈奴に備へるため北邊の各長城を統一して修築した。

三 萬里長城(抄)

土井 晩翠

一

生ける歴史か積り來し齡は高し二千年、
 影は萬里の空に入る名も長城の壁の上、
 落日低く雲淡く關山みすく暮の色、
 征馬懐みて留りて遊子俯仰の影長く。
 絶域花は稀ながら平蕪の緑今深し、
 春乾坤に回りは空悉く霞み行く、
 天地の色は老いずして人間の世は移らふを
 歌ふか高く大空に姿は見えぬ夕雲雀。

秦 皇

秦の始皇帝。

嗚呼跡古りぬ人去りぬ歳は流れぬ千載の
 昔に返り何の地か今秦皇の覇圖を見む、
 殘壘破壁聲も無し。恨も暗し夕ぐれの
 春朦朧のたゞなかに俯仰の遊子影一つ。

二

三皇五帝あと遠く六王終りて四海一
 四海の黔首ひれふして雷霆の威に聲もなし、
 「わが宮殿を高うせよ」一たび呼べば阿房宮
 「わが邊境を固うせよ」二たび呼べば萬里城
 春は驪山の花深く秋は上郡の雲暗く。

管絃の音雲に入る舞殿の春の夕まぐれ、
 袂を舉げて軽く起つ三千の宮女花のごと、

驪山

阿房宮

三皇五帝 支那上古の帝王。伏羲・神農・黃帝・少昊・顓頊・帝嚳・堯・舜。阿房宮 始皇帝の建てた宏大な宮殿。

驪山

管絃

花を散らして玉觥に浮す歌扇の風もよし、
彫龍の欄奥深く薫る蘭麝の香を高み、
珠簾を洩るゝ銀燭の光残りて夜や明けむ。

臨洮 今の甘肅省岷州。
遼東 秦の置いた郡名。今の奉天東南境。

西臨洮の嶺高し、こゝ遼東の谿深し、
流れを埋め山を截り壘を連ぬる幾千里、
篝の焰天を焼き劍の光霜凝り、
殺氣夏猶もの妻く守るは猛士二十萬、
漠のこなたに胡笳絶えて匈奴の跡は遠ざかる。
「北夷の憂ひ絶えはてて境は堅し國安し、
先王の書も焚け果てぬ、天下の儒者も埋りぬ、
わが萬世の業成りぬ、君主の思ひしかなりや。」

金闕 不死の金闕云々
仙宮に不死の藥を求めさせたこと

不死の金闕云々
仙宮に不死の藥を求めさせたこと

春靜なる東海の緑を涵す波の上、
不死の金闕遠くして童女五百の舟いづこ、
絳霞の光天上の花とこしへに匂へども
土に下れば沆瀣の示すはひとり世の脆さ、

「富も力も一場の夢覺め果てん後思へ」
「浮世の花の一盛り褪むるに早き色見ずや」
「歌臺の響よそにしてひとり嵐のつぶやくを、
知るや、夜半の阿房宮、後庭深く森暗く、
夜の阿房宮の後庭が深し森が暗し」

五籍
金人

仙人の仲字
金の人形

金人十二云々
始皇帝が天下の兵器を集めて十二の金人を鑄たこと。
一孤臣
張良をさす。

三 萬里長城(抄)

至尊の榮は高くとも名を玉籍に留め得じ、
金人十二鑄なせどもがれに無象の劍あり。

心を焦し身を碎くあゝ韓朝の一孤臣、

爾の策は成らずとも無常の風は荒かりき、

天地靜に夜更けて江流秋に咽ぶ時

ひとり圯橋のかたほとり燃ゆる心も鎮まりて

思ふやいかに人力の脆きを命の定りを

鐵椎血無し博浪沙、鮑魚臭有り沙丘臺。

嗚呼死屍未だ冷えずしてかれ萬世の業いづこ、

暗君嗣ぎて上に在り佞豎の害よなどあらしき、

民の怒は火の如く成卒は叫び兵は起ち、

佞
心のわ
けたる

暗君
二世皇帝
佞豎
趙高等をさす。

鐵椎血無し云々
張良が始皇帝を殺す考へて博浪沙で鐵椎を投げつけたこと。
鮑魚臭有り云々
始皇帝は外遊中沙丘臺で崩じたが、その崩じたかぐす爲に鮑魚を以て臭を亂して遺骸を宮に入れたこと。

楚人 項羽

火と精

斬蛇の劍
漢の傳國の寶。

二京
洛陽と長安。

楚人の一炬閃きて咸陽の宮皆焦土。

霽れざる空に虹懸けし複道の跡今いづれ、

雲あらざるに龍飛べる長橋の影はたいかに、

衰蘭露に悲しめば遺宮空しく草の宿、

驪山の麓春去れば花悉く涙なり。

斬蛇の劍炎精の光もさはれ極みあり、

甘泉殿の夜半の月かれも浮雲の恨あり、

その移り行く世の習二京の花をよそにして

邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶えず。

(曉 鐘)

三 萬里長城(抄)

三

大町桂月
名は芳衛。文章家。高知市の人。大正十四年歿。年五十七。

四 國家の盛衰

大町 桂月

東流の水

邯鄲の夢

盧生、邯鄲にて黄梁の煮えぬ間に立身し夢を見た故事。沙羅雙樹



萬里の長城・咸陽の宮殿
共に秦の始皇帝の築いたもの。

青丹よし奈良の都は荒れ果てて、伽藍徒らに古の名残を留め、星月夜鎌倉の府は廢れ盡して、陰鬼空しく雨に哭す。英雄の骨も朽ちてはまた土塊と擇ばず、美人の髑髏時に鋤犁に觸れて出づとも、誰か當年の倂を認めん。東流の水一度逝きてまた返らず、人間の富貴果してよく幾時ぞ。塞翁の馬上歲月徒らに過ぎて、邯鄲の枕頭芳夢早く覺めぬ。げにや、祇園精舎の鐘、諸行無常の聲に響き、沙羅雙樹の花、盛者必衰の色に出づ。萬里の長城未だ全く成らずして、山東既に亂れ、坑灰なほ温かにして、咸陽の宮殿三月紅なり。あはれ、萬世無窮と期せし始皇帝が遺圖も、忽ち二世にして盡きぬ。盛んなるもの豈竟に久しからんや。千戈天下に旁午して、兵馬倥傯、肝腦長へに地に塗れ、腥風いたる

陽り南

馬は云々

「縦」馬於華山陽、放牛於桃林虛。儼二干戈、而振兵釋旅。」(史記 周本紀)

文恬武熙

武官が安んじたをいふ

處に吹き荒ぶ間は、文化の芽の萌さんよしもなけれど、一たび馬は華山の陽に歸り、牛は桃林の野に放たれ、堯雨舜風、太平の氣象融々として起るに及びて、文化の芽茲に始めて萌す。太平愈、續きて文化愈、進む。文化愈、進みて生活の程度愈、高まる。所謂治に在りて亂をわするゝの危機、實にこの際に胚胎す。祖先百戦の山河に生れ出でて、目に旌旗の翻るを見ず、耳に鞀鼓の轟くを聞かず、文恬武熙、安きに慣れてまた危きを想はず。人益、利巧になりて益、死の惜しきを知り、欲に趨り利に就き、舌頭にはよく風を生ずれども、腕に蟲を捫る力だになく、風俗の奢侈に赴くにつれて、人心軟化し柔化し、終に腐敗す。文化の餘弊是に至りて極る。一旦緩急ありとも、安んぞよくこれに當るを得ん。天下はもとより殺伐の氣多くしてはよく治るものにあらねど、水靜になれば則ち腐敗す。文化長く續けば、即ち亂世に養成せられたる美風全く消滅す。敬虔の心

阿 説

へつらふ
午屋く親
の

四 國家の盛衰

は阿諛の心となり、剛毅の習は柔弱の習となり、敦厚は輕薄となり、誠實は詐偽となり、義理は黄金と代り、忠君愛國の念は私利私欲と變じ、天真爛漫の態は矯飾妖粧となり、かくて國家の元氣内に盡きぬれば、外に一時の盛觀を呈すとも、瓶裡の花の如く久しからずして自ら枯れんとす。これ別に耳新しき説にあらず、歴史は實に吾人に向つて常にこれを語るなり。

アッシリヤ
アジャの古代王
國。チグリス河
の上流に興る。

世界の文化はもと中央アジャ高原より出でぬ。而して印度は亡びたり、ペルシヤは亡びたり、アッシリヤは亡びたり、エジプトは亡びたり。荒涼たる山河、當年の殘礎を覓めんとすれども、また得べからず。歌舞の地烏雀空しく悲しみ、古塔月影の寒きに鎖し、蔓草武夫の夢を封ず。夕陽に昔を問へば、悲風千里より來り、荒墳に英雄を弔へば、零露長へに冷やかなり。嗚呼榮えし國は亡びぬ、文化の最も早く開けし國は最も早く亡びぬ。而して取つてこれに

マセドン
今のギリシヤの
北部地方の總
稱。

アレクサンドル
大王
セドン王フィ
リップの子(西紀
前三三三)。
八 紘

屋敷

暗
刃
月
見
え
ぬ

四 國家の盛衰

代りしものは、當時未だ文化の開けざりし國にあらずや。ギリシヤは歐洲中にて最も先に開けし國なり。その燦爛たりし文化は、今なほこれを討ぬるに足る。而して、ギリシヤは紀元前早くも北方の文化の光被せざりしマセドンのために征服せられぬ。ペルシヤはギリシヤよりなほ早く開けたる國にして、ギリシヤを蠻夷と侮り、幾度か大軍を發してこれを討ちしかど、はては、マセドンより起りて、未だ長くギリシヤの文化の空氣を呼吸せざるアレクサンドル大王が鐵蹄の下に蹂躪せられぬ。かくて、豪氣八紘を蓋ひ、雄圖世界を卷きたりしアレクサンドル大王も、一たびペルシヤの空氣を呼吸し、その優柔孱弱なる風習に接するに及びて、遊樂・飲酒に耽り、ためにその天命を縮めて天折せり。アレクサンドル大王は實に劍を把つてペルシヤを倒せり、而して、ペルシヤはまた文化の暗刃を以てこれに報じたりといふとも、必ずしも過言



鴉安ニ
毒ニ

ザンシツプス
スバルタの勇
將
ハンニバル
カルタゴの名
將、西紀前一八
三年歿、年六十
四。
コンスタンチノ
ーブル
今のスタンブ
ル。土耳其共和
國の首都ローマ
のコンスタンチ
ン大帝ここに奠
都した(西紀三
サラセン人
中世頃のヨ!
ロツパ人がアラ
ビヤ人を呼んだ
稱
蒙古人種
成吉思汗・拔都
等をさす

にあらじ。まことや宴安は鴉毒なり。
ローマはギリシヤに次で開けし國なり。その強盛なること實
に世界に比なかりしかど、文化の餘弊はその元氣を消磨せしめぬ。
百代の勇王ザンシツプスを辟易せしめ、萬古の名將ハンニバルを
屈せしめし當年のローマ人の子孫も、あはれやアルプス以北の野
蠻人に滅されぬ。その餘孽大いにコンスタンチノールに榮え
て、第二のギリシヤを現出せしが、これまたアジヤにて未だ開化せ
ざりしトルコのために滅されて、その文化も當時はじめて用ひ出
したる大砲の彈丸に摧碎せられたるにあらざや。なほサラセン
人が歐洲の南部に亂入せしを見よ、當年の蒙古人種が歐洲の東部
を蹂躪せしを見よ。すべての點に於て未開國は開化國に劣れど
も、たゞ兵力に訴ふる競争のみは、常にこれが勝を制することを示
せるにあらざや。



え
林正
燕
燕月
魏韓
趙

長
袖
緩
帶

これを近く支那に覓むるに、六國を併吞せし者は當時文化の最
も備らざりし秦にあらざや。爾來自ら王者と號し、中華と誇り、他
を蠻夷と卑しめ來りしかど、この蠻夷のために一たび滅されて金
となり、二たび滅されて元となり、三たび滅されて清となり、清また
亡びて中華民國となれるにあらざや。
更にこれを我が國の盛衰に考ふるに、文化大いに熟せんとすれ
ば、國力常に消耗せり。神功皇后が三韓を征服し給ふに至るまで
は、我が國の未だ全く開化せざりし時代にして、また國力の最も強
かりし時代なりき。佛教入り、儒教入り、外國の文化我が國に侵入
するに至りて、我が國力漸く衰へぬ。平安朝は、文化の餘弊その極
に達せし時代なり。平安朝と始終せし藤原氏が、一族朝廷に跋扈
し、長袖緩帶遊戯これ事とし、泰平に狎れて武を講ずるものなく、春
の朝に花を歌ひ、秋の夕に月を詠じ、優柔習をなし、萎靡風をなし、征

齒牙にだに懸けず

平氏藤原氏に代りて天下の權を握るに至りしかど不幸にして

舞腰良々

櫻梅少將

平維盛 重盛の長子

歌集を云々

忠度のこと

琵琶を云々

經正のこと

横笛を云々

敦盛のこと

知盛

清盛の子 文治元年(八四三)歿年三十四

討邊防のことは一に源平二氏に委し、武士よ、地下人よと賤しみ去りて、これを齒牙にだに懸けざりしが、時勢は一轉したり。やさしき筆執りて優劣を歌合に争ふ時代は去りて、愈、劍を執りて天下の權を争はざるを得ざる時代は來りぬ。しかしていふまでもなく、藤原氏は當時文化の感化を被らざりし武士のために蹴落されぬ。平氏、藤原氏に代りて天下の權を握るに至りしかど、不幸にして風紀の頽敗したる都門に居を占められたれば、彼が一族子弟看るく、優男となりぬ。春風簾前、舞腰良々として、風流閑雅に日を消したる櫻梅少將以下が、富士川の水鳥の聲に腰を抜かしたるも怪しむに足らず。一門浮沈の際に臨みても、歌集を懷にし、琵琶を懷き、横笛を腰にせる風流才子のみ多くして、知盛等一二人を除くの外、また武士らしきものもなかりければ、これまたいふまでもなく、源氏のために滅され了んぬ。

金閣寺

本稱は鹿苑寺

足利義滿の創建 北山に在る

銀閣寺

本稱は慈照寺

足利義政の創建 東山に在る

尾大掉はず

義昭

足利第十三代將軍 慶長二年(一五七三)卒、年六十

下の方より

ハコウカトウ

勢力のあり

わかろ

いかわる

尾大掉

足利第十三代將軍

慶長二年(一五七三)卒、年六十

下の方より

ハコウカトウ

勢力のあり

わかろ

いかわる

尾大掉

足利第十三代將軍

慶長二年(一五七三)卒、年六十

下の方より

ハコウカトウ

勢力のあり

わかろ

いかわる

尾大掉

足利第十三代將軍

慶長二年(一五七三)卒、年六十

下の方より

ハコウカトウ

勢力のあり

わかろ

源氏北條氏は、遠く京洛の地を去りて、當年の東夷の中心ともいふべき鎌倉に居りたれば、急には軟化せざりしが、足利氏は平氏の轍を踏みて京洛に居りたれば、早く墮落し始め、その軟化したる心の跡は金閣寺銀閣寺に残り、武力未だ副はざるに、早くも驕奢に耽り、尾大掉はず、十三代の間紛々擾々として過ぎ去り、遂に義昭に至りて全く亡びぬ。義昭は家を滅したるほどの人にて、もとより將軍たる伎倆はなけれども、流石に文化の餘德、否、餘弊には、天公亦憫

吾生否、月白蘆花淺水秋。など、詩のみは到底當時の武士の企て及ぶべからざるほどの妙手なりき。

足利氏に代つて天下を取りし信長を見よ。彼は、三好の舊臣の心を盡して鹽梅したる第一等の料理の、その口に適せざりしを怒り、第二等以下の料理に舌鼓を打ちて飽食せしまで、都人士の驕奢の味を知らざりし無骨漢なりしにあらざや。

風流男
在原業平。
言問ことばをたずねはむ都鳥
「名にし負はばい
言問はむ都鳥
我が思ふ人はあ
後の人は元先
りやなしやと。」
(伊勢物語)

交見まじりあひまりま年
解とひい骨
福ふくぬの
南後みなご紀きに口
かぞかぞ愚ぐらも
やや盛さか嘆なげ詞し

徳川氏は草茫々たる武藏野に府を設けしが、當年の風流男の言問ひし鳥の名の讖をなして、山奥ならねど、住めばこゝも都となりぬ。武勇儔なかりし三河武士も、その子孫は花の大江戸に太平の春に酔ひ、遊樂に耽り、奢侈に流れ、金銀珠玉を鏤めて腰刀の華美を誇るに至りては、また昔日の祖先が槍先の功名をも知らざるもの如し。この際、朱鞘の大刀を帯び、衣至、袖至腕、腰間秋水鐵可斷と歌ひつゝ、短褐弊袴を穿ちて毫も意とせざりし南海西海の武士、無骨はこの上もなけれど、無骨なるだけに都門の弊風に軟化せられず、豪氣の發するところ、勤王の魁首となりて、終によく幕府を倒ししにあらざや。

漫に文化といふ勿れ、漫に開化といふ勿れ、文化開化はなほ酒の如し。酒を飲むものは必ず酔ひ、文化開化に涵める國は必ず亡ぶ。歴史は正直なり、常に人間に向つてこれを語れども、おそや、魚市に

陸梁
はい、そ我ま
をす
未衣
皮ころも

孤燈歌々

山川端夫
法學博士。貴族
院議員。長崎縣
の人。明治六年
生。

入りて腥きを知らず、太平の安きに狎れて、人また危きを思はざるなり。嗚呼、國家昏亂して忠臣現れ、天下太平にして小人陸梁す。輕裝肥馬の間に醉生夢死するもの、ともに古今の興亡を語るに足らず。悠々たる世路、誰に向ひてか邦家百年の大計を説かん。一窓の夜雨そゞるに古を撫し、慨然として眠る能はず。案を拍ちて大息すれば、孤燈歌々として、三尺の秋水寒し。

(桂月全集第一卷)

五 世界平和への貢獻

山川 端夫

世界現時の排他的對立的趨勢は、斷じて平和を維持する所以の途ではない。世界大戰前の狀勢と同じく、全く危險なる局面に立つてゐる。石を抱いて深淵に臨むといふのは、斯かることを指していふのであらう。このまゝ之を放任し置くとしたら、各國は共

潰れとなるか、又は戦争となるかの外はないのである。さればこの形勢は是非共之を轉回しなければならぬ。尤も今日の事態は其の依つて來る所頗る遠く、又其の及ぶ範圍も極めて廣いので、一朝一夕に之を是正することは出來ない。結局は時の解決に俟つの外はないと思はれるけれども、吾々は出來得る限り速に之が打開を計るの氣運を促進するやう、努力しなければならぬと考へる。これは當に世界平和の爲のみならず、我が國發展の爲であつて極めて必要なことである。

今日、世界共通の悩みは、餘りに自國本位にとらはれ、毫も他を顧みずして自國のみを利せんとする風潮である。他を排し、他を抑へさへすれば、自國は益を受けると考へることである。各國共に深刻な不景氣に喘いで居る今日、止むを得ない勢とはいひながら、これでは世界の狀勢を好轉させることが出來ない許りか、自國も

やがて其の弊を受けることとなるのである。各國の間には政治上、經濟上あらゆる點に於て、嫌でも應でも已に孤立することの出來ぬ程に密接複雑な關係が出來上つて居る今日に於ては、もつと相互信頼の念を増し、衷心より相扶け相協調して行くといふ氣運を作らなければ、各國は何時迄も苦しむの外はない。各國民はこの際、活眼を大局に注いで、協力同心共に俱にこの難局を打開する必要を自覺しなければならぬ。

この事に就いては、現今朝日の昇るが如き勢を以て國際的に進出して居る我が國が、最も有力に發言しうるの地位に立つて居るのである。世界大戰の苦き經驗から、折角作りあげた國際聯盟も創立當時の期待に反して平和維持の力なきことを顯して居るので、この平和組織を今日の實情に適應するやう改善することも考へられるのであるが、今日の急務は寧ろ各國民の心理狀態を改め

國際聯盟

ることにある。一見迂遠な考へとは思はれるけれども、この方が却つて目的を達する捷徑である。

日本が聯盟を脱退したのは、東亞に於ける平和維持の手段に關して歐米諸國との意見の一致を見なかつた結果であつて、我が國としては國家の面目に掛けても、我が責任に於て、東洋に平和を確立しなければならぬ。滿洲國は我が國の援助によつて、すでに着着と發展して、今や抜くべからざる地位を築き上げて居る。他方我が貿易は多年の我が國民の努力の結果、幾多の人為的壓迫を排して世界的に進出して居る。

東洋の平和を維持し、我が國力の平和的發展を一段と向上せしめてこそ、我が國運の進歩は大いに期待せられるのである。優秀なる我が國民の自覺と努力とが失はれざる限り、前途に我が平和的活動を遮る何物もない。我が國民の心裡に驕慢自負の念が兆

せば、對外的危機は何時でも襲來するのである。我が國民は今日の好運に油斷せず、満足せず、反省一番大いに我が國力の充實をはかり、我が重大なる平和的使命を自覺し、列國をして能く我が意のあるところを了解せしめて、東洋に於ける平和維持をはかると共に、列國を導き、相共に共存共榮の途を進むやうにしなければならぬ。それにはひとり外交官や政府當局許りでなく、國民各自が誠意と熱心とを以て世界平和の達成に貢献するの用意を必要とするのである。

(「國際知識」に據る)

六雅文抄

みやひやかふる人まよ

一萩をめぐる詞

清水濱臣

清水濱臣
通稱は玄長。國
學者。村田春海
の門人。江戸の
人。文政七年三
月四日歿、年四十
九。

山上の國司

萬葉集中の歌人
山上憶良。神龜
(元四一三六)中
筑前守となる。
天平五年(三九五)
歿。

七種の歌

「秋の野に咲きた
る花をおよびを
りかき敷ふれば
七種の花。
萩が花尾花葛花
撫子の花女郎花
また藤袴朝顔の
花。」
(萬葉集)

木の花は春に匂を盡し、草の花は秋を時とすれば、誰も皆春は山
邊をとめ、秋は野路にあくがるゝをこそ遊びの道の常とはすれ。
抑、花野の秋に咲き亂るゝ千草は、とを、はたみそよそと、その數多か
めれど、これはしもと取出でて愛で弄ぶべきは、彼の山上の國司の
よみ置かれたる七種になむ盡きぬべき。
そが中にも亦勝れたるは、何れとか定めむ。女郎花はいとなま
めかしく懐しげなれど、唐人もなにがしとかその名をよびておと
しめたるもことわり、花の盛りなる程こそあれ、はてはうたて
あやしき香のそひて、花瓶に入りたるなごりなどもあさましきま
でに、鼻さへ打覆はるゝや。撫子は唐に倭に色を交へて美はしく

萩

指を折る

多々あまの

あししり



古き歌にも云々
一人皆は萩を秋と
いふよし吾は尾
花がすゑを秋と
はいはむ。
(讀人知らず、
萬葉集)

かつみつ
なみた

名真

程なき
裁庭

やいしなみ雅文抄

あてなれど、常夏にうつろはずして、秋にまで咲きかゝれるが飽き
たる方もあるべし。朝顔はいとらうたし。朝ごとに色改むるな
ど心地清げなれど、これはまた見る程もなく萎れ渡りて、露のひる
まをだに待たぬが事足らぬ心地する。葛は風のまに、吹き返
す葉末のうら珍しきこそあれど、はひ廣がりもうるさく、藤袴は匂
のいひしらぬはさるものから、見立てなき花のさまならずや。尾
花ぞ古き歌にも、秋とはいはむと詠みたれば、あるが中にも優りた
るやうなれど、廣き野末にめぢの限り高やかにさし靡きたるは、白
妙の袖とも誤たれて心とまる心地すれど、二もと三もとが處せき
つぼの内などに生ひたてらむは、何のをかしき節かあらむ。
いでや萩の花をみよ、秋の初風やうく、身にしみ渡る程より、か
つがつ咲きそめて、或はなだたる大野ら、或は程なき前栽、多くも少
くも、やごとなき御垣の下にも限らず、葎はふ賤がはひりをもきら

律、雜言、口

擣衣きぬた砧いせ砧
衣板いいた略

多妙

はず、處えて匂ふさま懐しく、はためてたきに非ずや。さらば七種の内にも優るべく、千草の中にも勝れたるは、この花をさしおきて又何れとかいはむ。

二 擣衣を聞く

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも又しきる。雁がねの聲の擣衣をさそふにやあらむ、擣衣の音の



(筆儷海田小) 圖衣擣下月

をりのうきゆるか、皆あらず聞く人の心のわびしきなり。里のさびしきか、擣つ

三 漁父辭

鱸のなます思ひ出でけむ人
吳人張翰、晉に仕へ、故郷の鱸を思ひ出し官をすてて歸つた故事。
直なる針に云々
太公望呂尙の故事。

清水、浪臣

加藤千蔭
號は芳宜園。國學者。江戸の人。文化五年(二四六)歿、年七十四。

秋吹く風に耳欝てて故郷の鱸のなます思ひ出でけむ人こそ、げにさる事とは覺ゆれ。岸の額に老の浪をたゝみて、直なる針に王公の位釣り得し翁はうらやましくもあらずや。我はたゞ世を捨舟に棹さして、山陰のしづけく、水草の清からむあたりに、息の緒のかぎり心を遣りて、うへなき樂しみとはなしぬべきぞかし。

四 初雁を聞く辭

加藤千蔭

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ、獨り高き屋に登りて七つをのを琴をかきならしつゝ、秋の風のことはをうそぶき出だせる折しも、遠つ人初雁がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばしひきさしつゝ見さくれば、姿は雲路になむ消え失せぬる。いでや白雪のふるとしよりしもはねならはしつゝ、かげるふの春立ちそむるあした、日影うらくと打霞めるに、軒近き篋にねぐらしめつる

見
遠く空を眺め

笠にぬふてふ云

「青柳を片絲によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」

(古今集)

待たるゝものは「あらたまの年たちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲」
(素性法師、拾遺集)

今一聲云々
「行きやらで山路くらしし時鳥今一聲の聞かまほしさに」
(源公忠、拾遺集)

鶯のまだ片なりなるうひごゑにほひ出だせるより、笠にぬふてふ花のかをりみてる枝に来るつゝ、ほこりにさへづるはめでたきものから、雲にたくへし櫻も散りすぎて、青葉しげき木の間を立ちぐく聲のむくつけきには、「待たるゝものは」といひしに引きたがへてぞ覺ゆるかし。池の藤波夏かけて匂へる頃、ほとゝぎすのそれかあらぬかたとどらるゝ一聲より、花桶のゆくりなく香にはほへる曙、有明の月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて過ぎゆくは更なり、小雨そぼふるゆふべ物おもひにいを寝ずして更けすぐる夜半に、をち返り鳴くを誰かあはれと思はざらむ。しかはあれど、山かたつけるわたりにはこちたきまで飛びかひつゝ、梢にしもおりゐて高やかに鳴きとよめるなどは、「今一聲の」といふべくもあらざうれたきや。

そもく、雁は常世の國をや出でけむ、三越路よりや來ぬらむ。



花を見すつる云
「春霞立つを見すててゆく雁は花なき里にすみやならへる」
(伊勢、古今集)

或時は眞木たてる荒山のあしたの霧にむせび、或時はみるめ刈る八潮路のゆふべの浪をつばさにかけて、草の枕だに結びあへず。天路遙に思ひあがりて、夕暮の雲の旗手に、聲は小舟こぐ唐櫓に通ひ、姿は薄墨にかける文字に似て、ひとつら過ぎゆきつゝをちかたの田づらに落ちくるさまさへおほどかにして、その時しも萩の葉に音なふ風、萩が枝に亂るゝ露、隈なき夜半の月、染めかくる木々のもみぢ、千たび八千たび打ちすさぶ砧の音、おしこめてあはれなる折に逢ひぬるが限りなくめでたくなむ。また別けていぬる春べには花を見すつるなど咎むれど、しづけるみ山の花をつばさにしめむとて、都の空を急ぐならむと思へ



飛 雁 (中島來章筆)

ば、そもはた憎からずこそ。雁よ、く、なれこそはわが思ふどちな
りけれ。

われもいざ秋をあはれぶ友どちの

つらには漏れし天つかりがね

(うけらが花)

五雪をめぐる記

村田春海

かきかぞふ四つの時につけて、むらぎもの心をやるわざなむ多
かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよるこぶ三つのならは
しこそ、世にたぐひなきすさみとはすめれ。ことさへぐ唐人のた
めしにも、敷島の大和の國ぶりにも高きも、卑しきも隔つる事なく、
古より今にかよはして、こを歌ににび、文に記してめであへるは、
いづれを劣れりとも、いづれを優れりとも、品定むべきたぐひなら
ぬは、もとよりあげつらふ事ならねど、處に従ひ人によりて、おのが

村田春海
號は琴後翁。國
學者。江戸の人。
文化八年(西七)
歿、年六十六。

野づかさ

しみ、
はたばり

じし心のひくかたなくてやはあらむ。

梓弓春のあした、うらくと紐解きそむる花の心をとほむには、
まづかしこの野づかさ、この山里、露を凌ぎ巖をたどりて、名ぐは
しき陰を求めてこそ、類なきにほひをも見るべけれ。おどろなる
垣ほのうち、あやしき伏屋の前に、ひと木ふた木を移し植ゑたらむ
は、なかくに花のおもてをぞふせつべき。また眞萩さく秋のさ
かり、隈なき月の光は所をわかねど、あるは高殿の簾をかへて、千
里の空を望み、あるは逝く河の流れにうかびて、水底の影を弄びて
こそ、心の雲もはるべけれ。小家しみ、に立ちならび、はたばりな
きはひりの庭にうづくまり居て見むには、塵芥のけがしさも、澄み
渡る光にいよ、あらはれ行きて、かへりては月うとかれとぞ覺ゆ
める。かれば月と花とは、所がらこそあはれもうちそはるめれ。
さるはかたゑ翁がたぐひの、身のほどの品賤しくして、わびしき住

家にのみかきこもり居つゝ、病にのみかゝづらふ身は、かの高殿の望、やかたのすさみは、いかでか思ひもかけむ。又野山の遊びも、おのづから時に後れ折を過して、常に心に背くふしなむ多かめる。かれ雪ばかりはこの二つにことなり、葎に閉ぢたる門のうちも、たゞ一夜のうちに玉敷く庭とうつろひ、あばらなる板屋が軒も、時の間に白銀を散らせるばかりに姿をかへもて行きて、朝夕のいぶせさもさらに覺えず。また目なれたる市の巷も、たちまちに景色をそへて、いひ知らぬ山里の思ひをなし、行きかふあき人の蓑笠までも見所ありと覺え、はかなき本草よろづのものも、さながらめづらかなりとのみ目とゞめらるゝは、たゞ居ながらにして境を移し、所をかふるとやいふべからむ。かくてこそ心に足らはぬことな、外に羨むべきふしもあらね。さればこの雪にのみ翁が心を寄するも、處に従ひ人によりたる老のすさみなるはや。(琴後集)

藤岡作太郎

號は東國、文學博士、國文學者、金澤市の人。明治四十三年歿、年四十一。

七 我が國の繪畫

藤岡作太郎

日本畫と西洋畫とは漸次混融して、其の區劃も明瞭ならざるに至るが如しといへども、此の兩者の純粹なるものを比較すれば、各自の特色は猶甚だ顯著なり。當に絹紙と彩具との相違のみならんや。其の用意筆法等に於て皆然り。彼にあつては藝術は科學と並行し、理性は想像の銜となりて、遠近明暗力めて自然に背かざらんことを期し、此にあつては文化の精神的方面、獨りまづ進み、筆を揮ふもの感興に乗じて腦裏の印象を瀉ぎ出す。彼は色彩を旨とし、此は描線を重んじ、彼は實相の通りに空氣の色をも漏らすことなく、此は主體の外は生地（じぢ）の儘に存す。一は濃艶、一は瀟洒、一は輪奐（りんげん）たる樓臺（ろうたい）に顯官（けんくわん）が客を引く如く、一は幽閑なる茅屋（ちやう）に高士（こうし）が梅を愛するに似たり。此等の差別は蓋し其の初よりして然りし

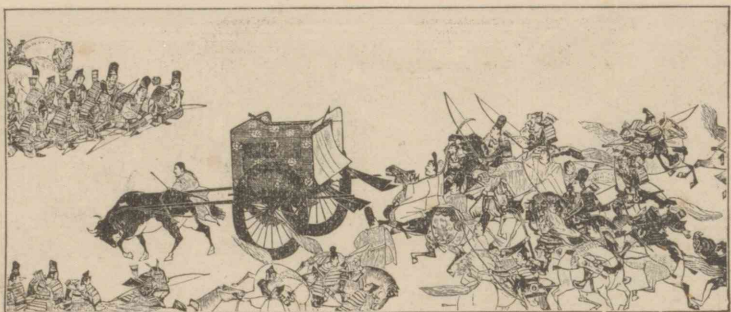
運わりのま

酒

聖德太子
 用明天皇の皇子。推古天皇の太子。推古天皇の二十九年(三三六)薨去、御年四十九。
 巨勢金岡
 畫家。巨勢家の開祖。清和・陽成・光孝・宇多・醍醐の五天皇に歴仕して大納言に至つた。歿年未詳。
 法成寺
 今の京都市上京區仙洞御所の附近。藤原道長の創建。後一條天皇治安二年(六一三)落成。
 法勝寺
 承保二年(三五五)八月白河天皇の勅願によつて建立されたもの。

にあらざ、各自獨立したる歴史が漸次に養成したるものにして、今はた兩洋交通の歴史によりて、之を合一せんとする傾向あるなり。我が國の文藝に於ける佛教の感化の甚深なることは多言を要せず。眞の美術の歴史といふは聖德太子の佛教興隆に始まり、爾來進歩劇甚、以て偉大なる奈良朝に及べり。されど此の時代も、彫塑に於てこそ千古無比の名を博すべけれ、繪畫の歩調は未だ之に伴はず、平安朝に巨勢金岡が出でし頃より、漸く丹青全盛の世は來れるなり。而して奈良朝の彫塑がなべて佛像なるが如く、平安朝の繪畫も概して佛畫の外に出でず。按ふに平安朝の如く形式美を偏重したる時代は他に類例を見ず。佛教も亦形相の具足によりて、内心の信仰に近づくべしとしたり。法成寺法勝寺の如き、今廢墟をだに存せざれども、金堂講堂、七寶莊嚴、天を摩する大塔、虹と曳く廻廊、すべて一代の工を盡しし状態は歴史の傳ふるところ、今

鳳凰堂
 京都府久世郡宇治町に在る平等院。もと源融の別荘であつたが、陽成天皇の行宮、宇多・朱雀兩天皇の離宮となり、又藤原道長の山莊となり、その子頼通は遂に佛像を安置して寺とした。



部一の巻繪物語治平

に存する鳳凰堂を見ても其の一端を覗ふべし。香煙徐に薫して幢幡を掠め、蓮華頻りに散つて轉讀にたぐふ。龍頭の舟は池上に浮んで笙鼓月に牙え、頻伽の袖は庭前に翻りて舞容風に堪へず。恰も是れ坐ながらなる極樂淨土、紫雲の來迎を待たずして、身は既に汚濁世界を離る。此の如き場を用ふる畫像なれば、彩華炫耀、丹碧映射、其の色は珊瑚、水晶を碎き、其の線は黄金の箔を切り、或は慈悲圓滿、或は忿怒破邪、十



堂風鳳

平治物語繪卷

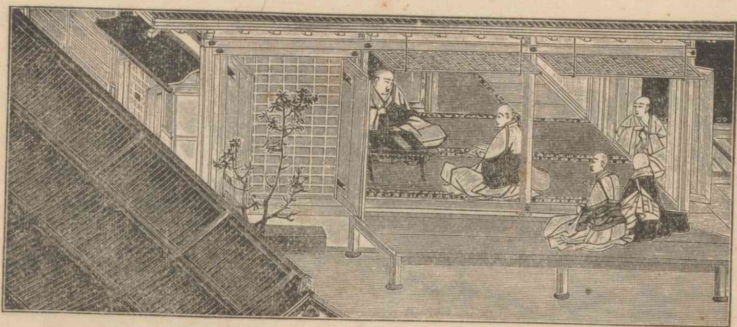
平治の亂をうつしたものの、原本の今に傳はるもの三卷。住吉慶恩の畫、藤原家隆詞書と傳へられる。

圓光大師畫傳

法然上人の畫傳。知恩院法然上人畫傳(土佐吉光外數名筆)は有名である。

雪舟

通稱は小田等楊。室町時代の畫僧。號して雲谷軒といつた。備中國(岡山縣)の人。永正三年(三六)歿、年八十七。



圓光大師畫傳の一節

分に濃く、飽くまで鮮やかに、精を窮め、微を闡きて、後世の乾枯酒脱なるものとは全く撰を異にしたること、想見するに足る。
鎌倉時代の繪卷物も亦日本繪畫の精華なり。平治物語繪卷等は源平鬪争の慘狀を寫し、圓光大師畫傳等は新佛教勃興の機運に隨ふ。いづれも時代の反映にして又不朽の逸品たるを失はざれども、内容外形共に根本の變化を受けたるは、實に東山時代の繪畫にして、僧雪舟等其の代表者たり。此の革新は禪宗の提撕によりて成り、鎌倉時代に此の宗の傳來せしより、漸く養ひ來れる勢力のこゝに頂點に達したるものに

結跏趺坐



して、香茶の技と榮枯を共にせり。抑、平安朝の佛寺を去つて禪刹の門をくゞるや、彼此別天地の感なくんばあらず。結跏趺坐して靜寂の境に入れば、物の美醜も眼を遮らず。一旦其の道に悟入すれば、經典佛像何の要かあらん。教外別傳といひ、以心傳心といひ、精神を主として形體に泥まず。譬へば、能樂に何等の背景を設けずして、しかも能く雲煙萬里の情趣を偲ばしむるが如し。繪畫も此れに同じく、色を棄てて筆に託し、巧を抛ちて氣を驅り、蒼枯にして恬澹、破墨一掃して遠山を産み、秃筆數行にして樹石を刻む。一見すれば兒戲、熟視すれば神工、益味はうて益趣あり。恍惚として吾、我を忘る。即ち是れ東山時代の特色にして、流風餘韻延いて近代に及べり。
桃山時代は豪華の氣一世を蓋ひ、繪畫も稍移りて雄大穠麗の風を喜べども、未だ東山の根據を衝くに及ばざりき。江戸時代に至

狩野 狩野正信を祖とする日本畫の一派。正信は足利義政に仕へた人。

住吉

住吉慶恩を祖とする日本畫の一派。慶恩は建仁、元久頃の人。その子孫の具慶に至り、狩野家と相並んで江戸幕府の御畫師となつた。

光琳

本名は尾形方祝。光琳派の祖。京都の人。享保元年(三三)歿、年五十六。

一蝶

姓は英。大阪の人。享保九年(三三)歿、年七十三。菱川師宣房國(千葉縣)の人。元祿七、八年頃歿。



(筆堂雅大) 鴉歸林寒

つて、幕府の消極なる方針は更に其の規模を縮めて、枯淡の域に歸らしめ、門閥の貴に誇れる狩野住吉も先人の糟粕を嘗むるのみ。元祿の盛時には、裝飾に傾ける光琳滑稽の才ある一蝶あり。菱川師宣以來の浮世繪が、時勢粧を寫して、山水花鳥以外に題目を求めたるは、最も注意すべしといへども、鄙俗に流れて遂に高尚なる趣味に應ずる能はず。大雅等の文人畫は、東山の繪畫に比すれば、全然別種のものに屬すれども、匠氣を思み、形似を疎にし、氣韻生動を以て第一義とするところは即ち相似たり。應舉等の寫生畫は自然の摸寫に力めて、別に一流を立てたるものなれども、また清淡洒脫の習を脱するを得ず。訥言が創めたる土佐古風、

大雅

本名は池野無名。南宗畫の開祖。京都の人。安永五年(四三)歿、年五十四。

應舉

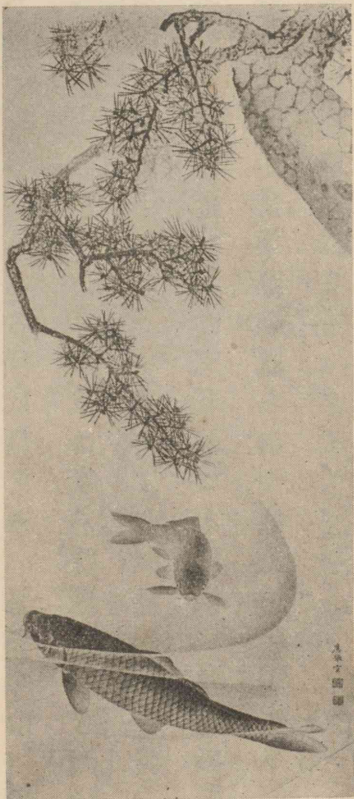
姓は圓山。圓山派の祖。丹波國(京都府)の人。寛政七年(四五)歿、年六十三。

訥言

姓は田中。尾張國(愛知縣)の人。文政六年(二四)歿。

容齋

本名は菊池武保。明治十一年歿、年九十一。



(筆舉應山圓) 鯉

容齋が好める歴史畫の如きは、即ち學界に於ける國學の興隆に齊しく、また時勢の反響なり。但し、此は彼の如き價值なきを憾とするのみ。一派また一派、各盛衰の數を免れざりしが、未だ其の間に崛起して斯道の根本的革新に成功せるものなく、かゝるうちに明治の昭代は來れり。

(東圃遺稿)

自由の自然現象を研究する所の内

吉村冬彦
本名は寺田寅彦。理學博士。高知縣の人。昭和十年歿。年五十八。

八 科學者と藝術家との共通点 吉村冬彦

藝術家にして科學を理會し愛好する人も無いではない。又科學者で藝術を鑑賞し享樂する者も随分ある。しかし藝術家の中には科學に對して無頓着であるか、或は場合によつては一種の反感を抱くものさへある様に見える。又多くの科學者の中には藝術に對して冷淡であるか、或は寧ろ嫌忌の念を抱いて居るかのやうに見える人もある。場合によつては藝術を愛することが科學者としての墮落であり、又恥辱である様に考へて居る人もあり、或は文藝といふ言葉から直ちに不道德を聯想する潔癖家さへ稀にはある様に思はれる。

科學者の天地と藝術家の世界とは、それほど相容れぬものであらうか。これは自分の年來の疑問である。

①

夏目漱石先生が嘗て科學者と藝術家とは、その職業と嗜好とを完全に一致させ得るといふ點に於て共通なものであるといふ意味の講演をされたことがあると記憶して居る。勿論藝術家も時として衣食の爲に働かなければならぬと同様に、科學者も亦時として



吉村冬彦

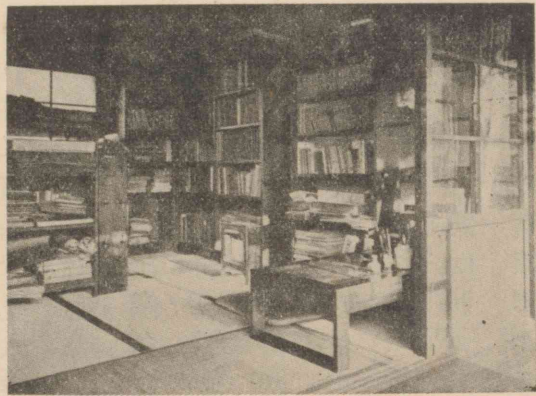
しては同様な目的の爲に自分の嗜好に反した仕事に骨折らなければならぬことがある。しかしその場合にで

もある事を忘れ、無我の境に入り得る機會も少くない様である。況や衣食に窮せず、仕事に迫はれぬ藝術家と科學者とが、それらの製作と研究とに没頭して居る時の特殊な心的情態は、その間何等の區別をも見出し難い様に思はれる。

②

尤もそれだけのことならば、或は藝術家と科學者とのみに限らぬかも知れない。獵師が獲物を狙つて居る瞬間に經驗する機微な享樂も、樵夫が大木を倒す時に味はふ一種の本能満足も、これと類似の點がないとはいはれない。しかし科學者と藝術家との生命とする所は創作である。他人の藝術の模倣は自分の藝術でないと同様に、他人の研究を繰返すのみでは科學者の研究でない。勿論兩者の取扱ふ對象の内容には比較にならぬ程の差別はあるが、そこには又かなり共有な點がないでもない。科學者の研究の目的物は自然現象であつて、その中に何等かの未知の事實を發見し、未發の新見解を見出さうとするのである。藝術家の使命は多様であらうが、その中には廣い意味に於ける天然の事象に對する見方とその表現の方法とに於て、何等かの新しいものを求めようとするのは疑ひもないことである。又科學者がこの様な新しい

事實に逢着した場合に、その事實の實用的價值には全然無頓着に、その事實の奥底に徹底するまでこれを突きとめようとすると同様に、少くとも純眞なる藝術が一つの新しい觀察創見に出逢つた場合には、その



吉村冬彦の書齋

實用的の價值などには顧慮することなしに、その深刻なる描寫表現を試みるであらう。古來多くの科學者がこの爲に迫害や愚弄の焦點となつたと同様に、藝術家がその爲に悲惨な境界に沈淪せぬまでも世間の反感を買つた例は尠くあるまい。この様な科學者と藝術家とが相逢うて肝膽相照すべき機會があつたら、二人は恐らく會心の握手をかはすに躊躇しないであらう。二人の目指す所は同一なる

眞の半面である。

世間には科學者に一種の美的享樂があることを知らぬ人が多
 いやうである。しかし科學者には、科學者以外の味はふことの出
 來ぬやうな美的生活があることは事實である。例へば古來の數
 學者が建設した幾多の數理的の系統は、その整合の美に於て、恐ら
 くあらゆる人間の製作物の中で最も壯麗なものであらう。物理
 化學の諸般の法則は勿論、生物現象中に發見される調和的普遍的
 の事實にも、單に理性の満足以外に吾人の美感を刺戟することは
 少くない。ニュートンが一見捕捉し難い様な天體の運動も、簡單
 な重力の法則によつて整然たる系統の下に一括されることを知
 つた時には、實際ボルテールの謳つた様に、神の聲と共に渾沌は消
 え、闇の中に隠れた自然の奥底はその帷帳の開かれて、玲瓏たる天
 界が眼前に現れた様なものであつたらう。フォークトはその結

ニュートン
 英國の大數學者
 大物理學者
 (西紀一六四二—一七二七)
 ボルテール
 佛蘭西の大哲學
 者で文學者(西
 紀一七三二—一七八)
 フォークト
 フインランドの
 礦物學者(西紀
 一八二一—一八七九)

科學者には美的享樂があることを知らぬ人が多
 いやうである。しかし科學者には、科學者以外の味はふことの出
 來ぬやうな美的生活があることは事實である。例へば古來の數
 學者が建設した幾多の數理的の系統は、その整合の美に於て、恐ら
 くあらゆる人間の製作物の中で最も壯麗なものであらう。物理
 化學の諸般の法則は勿論、生物現象中に發見される調和的普遍的
 の事實にも、單に理性の満足以外に吾人の美感を刺戟することは
 少くない。ニュートンが一見捕捉し難い様な天體の運動も、簡單
 な重力の法則によつて整然たる系統の下に一括されることを知
 つた時には、實際ボルテールの謳つた様に、神の聲と共に渾沌は消
 え、闇の中に隠れた自然の奥底はその帷帳の開かれて、玲瓏たる天
 界が眼前に現れた様なものであつたらう。フォークトはその結

晶物理學の冒頭に於て、結晶の整調の美を管絃樂に譬へて居るが、
 又最近學者の研究によつて始めて明らかになつた結晶體の分子
 構造の如きものに對しても、多くの人は一種の美に酔はされるわ
 けに行かぬことと思ふ。この種の美感は、例へば壯麗な建築や莊
 重な音樂から生ずるものと、根本的にかなり似通つたところがあ
 る様に思はれる。

又一方に於て、藝術家は科學者に必要なと同程度若しくはそれ
 以上の觀察力や分析的の頭腦をもつてゐなければなるまいと思
 ふ。この事は或は多くの藝術家自身には自覺してゐないことか
 も知れないが、事實はさうでなければなるまい。如何なる空想的
 夢幻的の製作でも、その基底には鋭利な觀察によつて複雑な事象
 を、その要素に分析する心の作用がなければなるまい。若しさう
 でなければ、一木一草を描き、一事一物を記述するといふことは不

科學者には美的享樂があることを知らぬ人が多
 いやうである。しかし科學者には、科學者以外の味はふことの出
 來ぬやうな美的生活があることは事實である。例へば古來の數
 學者が建設した幾多の數理的の系統は、その整合の美に於て、恐ら
 くあらゆる人間の製作物の中で最も壯麗なものであらう。物理
 化學の諸般の法則は勿論、生物現象中に發見される調和的普遍的
 の事實にも、單に理性の満足以外に吾人の美感を刺戟することは
 少くない。ニュートンが一見捕捉し難い様な天體の運動も、簡單
 な重力の法則によつて整然たる系統の下に一括されることを知
 つた時には、實際ボルテールの謳つた様に、神の聲と共に渾沌は消
 え、闇の中に隠れた自然の奥底はその帷帳の開かれて、玲瓏たる天
 界が眼前に現れた様なものであつたらう。フォークトはその結

立體派や未來派が、直接五官の印象を離れた概念の表現を試みてゐるとかなり似よつた所がないでもない。

次に自然科學に於ては、その對象とする事物の「價值」は問題とならぬが、その研究の結果や方法の學術的價值には自ら他に標準がある。藝術の爲の藝術では、その取扱ふ物の價值よりその作物の藝術的價值が問題になる。さうして後者の價值といふことがむづかしい問題であると同様に、前者の價值といふことも嚴密には定め難いものである。

科學の法則や事實の表現は、これを言ひ表す國語や方程式の形の如何を問はぬ。しかし藝術は事物そのものよりは、これを表現する方法にあるともいはばいはれぬことはあるまい。しかしこれもさう簡單ではない。成程科學の法則を日本語で譯しても英語で表しても、それは問題にならぬが、しかし法則自身が自然現象

の一種の言ひ表し方であつて、事實そのものではない。唯言ひ表すべき事柄が比較的簡單である爲に、表し方が多様でないばかりで、必ずしも唯一ではない。藝術の表現しようとするものは、寫してある事物自身ではなくて、それによつて表さるべき「或物」であらう。唯その「或物」を表すべき手段が一樣でない、國語が一定しない。しかし強ひていへば、一つの藝術品は或言葉で表した一つの事實の表現であるともいはれぬことはない。然らば植物學者の描いた草木の寫生圖や、地理學者の描いた風景のスケッチは藝術品といはれるかといふに、それは勿論違つたものである。何故とならば、事實の表現は必ずしも藝術ではない。繪を描く人の表さうとする對象が違ふからである。科學者の描寫は草木山水に關した或事實の一部分であるが、藝術家の描かうとするものはもつと複雑な「或物」の一面であつて、草木山水はこれを表す言葉である。し

科學者の言ひ表し方
藝術の爲の藝術
科學者の描寫は草木山水に關した
或事實の一部分であるが、藝術家の描かうとするものはもつと複雑な「或物」の一面であつて、草木山水はこれを表す言葉である。

かしその作物は作家だけの主観に存するものではなくて、ある程度までは他人にも普遍的に存するものでなければ、鑑賞の目的物としての謂はゆる藝術は成立せず、随つてその批評などといふことも無意味なものとなるに相違ない。この「或物」を強ひて言語や文字で表さうとしても無理なことであらうと思ふが、自分は唯私にこの「或物」が科學者の謂はゆる「事實」と稱し「法則」と稱するものと相去ること遠からぬものであらうと信じてゐる。

(萬華鏡)

九十訓抄

十訓抄
三卷。著者未詳。
鎌倉時代のもの。
近古の小話を集めた教訓書。

一

すべて人の振舞は、おもらかに言葉教をいしずくなにて、人をもならず、人にもならずされず、戯れを好まず、おとなしくさしふるまひて居れば、心の中は知らず、よきものかなと見えて、人にも恥遠慮ぢられ、ところをもおかるゝなり。かゝれども、これはなつかしく思はしき方にはあらず。たゞみだるべき所にはみだれ、折折にしたがひて戯れをもし、をかしき事をも笑ひ、人のなごりをも惜しみ、友にしたがふ心ありて、親わりなく思はれぬるは徳多かり。

二

人の世にあるならひ、驕慢を先として、よく穩便なるは少し。或は、自由の方にて穩やかならず。これは、わが涯分を料らず、さしも

自らの方へんか
みられうととけた
と云ふ

ある經に
「願作心師、不
師於心。」
(涅槃經)

なき身を高くおもひあげて、主をも輕しめ、傍輩をもさぐるなり。
或は偏執の方にてかたくななり。これは、わが思ひたることをい
みじうして、人のいふことを用ひざるなり。或は、世にかはれる振
舞あり。これは、昔をのみいみじと思ひて、今の世にしたがはぬな
り。或は、折節に似ぬをこあり。これは、内々よくなれにしかばと
思ひてはれに出でて人をならし、もしは、うちとけ遊ぶ所に交りて、
われは未だ亂れぬまゝに、ことうるはしう紐さしかためて人をし
らかし、その座をさますなり。

おほかた、かやうのことは、憍慢をもととして、心のをさなきより
起れり。これによりて、つひに生涯をうしなひ、後悔を深うす。か
かれば、たとひ、身をよしと安んじ、昔をいみじとしのび、物をおもし
ろしと思ふとも、人目をはかり世のそしりをつゝしみて、心に心
をまかすまじきなり。されば、ある經には、「心の師とはなるとも、心

自らの心とてしする
すうとし自らの膝を
に違はぬ後にはな
なるらぬ。

形は変そつても

不覺り失敗

この位を
なつと云ふ
あつた
大教

悔まかつら
二
身か
人を

身を
人を

を師とせざれ。」と説かれたりとかや。凡そ、貧しき者の諂はざる
はあれども、富める者の驕らざるはかたければ、皆人の習なれども、
身のいたりて、徳の重からむにつけても、よくしづまりて穩やかな
るおもひをさきとすべし。
(可離憍慢事)

三

人をあなづることは、しなかはれども必ずあることなり。或は
貧しく賤しきをもあなづり、或は、不覺なるをもあなづり、或は、われ
よりさがれるをもあなづりて、することをいふことをも、さばか
りにこそと思へり。或は、親しみむつるゝを侮づり、おほかた、不運
なるものをば、行ふ所のことから、娘からぬやうに思ひ、いやしきも
のは、ふるまひとふるまふこと、いたづらごとと思へり。これは無
智の人のあることなり。これによりて、いふまじき言をもいひ、す
まじき業をも振舞ふほどに、悔るかつらにたはぶれして、想はざる

厭はれはすや。人のあらし
 嫌はれはすや。人のあらし
 思ひけられぬはれぬ

何れとなく
 笑の中の劍
 「李義甫容貌温
 恭、與人語、
 必嬉怡微笑。而
 狡險忌克、故時
 人謂之義甫笑中
 有刀。」
 (事類全書)

外の恥がましきことにもあひ、厭はるましき者にも厭はれぬれば、
 人に軽く思ひけたれ、心劣りせらるゝなり。
 (不可悔人倫事)

四

人は慮なく、言ふましき事を口とく言ひ出し、人の短をそしり、し
 たる事を難じ、かくす事を顯し、はぢがましき事をたゞす。これら
 はすべてあるましきわざなり。われは何となく言ひ散らして思
 ひもいれぬ程に、言はるゝ人は思ひつめて、憤深くなりぬれば、はか
 らざるに恥をも與へられ、身の果つる程の大事にも及ぶなり。笑
 の中の劍はさらでだにも恐るべきものぞかし。又よくも心得ぬ
 事をあしざまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるゝものなり。
 大方口輕きものになりぬれば、某にその事なきかせそ。彼の者に
 な見せそ。」など云ひて、人に心をおかれ、隔てらるゝ、口惜しがるべ
 し。又人のつゝむ事のおのづから洩れ聞えたるにつけても、かれ

4 ねえ、戒せられ
 5 遠うけられ
 6 其人の字、所々にうたがひ
 7 其人の字、所々にうたがひ
 8 其人の字、所々にうたがひ
 9 其人の字、所々にうたがひ
 10 其人の字、所々にうたがひ
 11 其人の字、所々にうたがひ
 12 其人の字、所々にうたがひ
 13 其人の字、所々にうたがひ
 14 其人の字、所々にうたがひ
 15 其人の字、所々にうたがひ
 16 其人の字、所々にうたがひ
 17 其人の字、所々にうたがひ
 18 其人の字、所々にうたがひ
 19 其人の字、所々にうたがひ
 20 其人の字、所々にうたがひ

話されしなど疑はれむは面目なかるべし。しかれば、がたゝ人
 のうへをつゝし、多言を止むべきなり。
 (可誠人上多言等事)

五

人々より合ひてさるべき遊びなどせむには、たとひ身にとりて
 安からずくちをしき事に遭ひたりとも、かまへてその日のさはり
 あらせしと計らふべきなり。「その人のありてしかく、の折の事
 さめにき。」と言はるゝ口惜しき事なり。しかれば、行かぬ先より
 計らひ、悪しがるべき所へはさし出でぬには如かじ。もし悪しく
 計らひて、交り居なむ後は、おぼろげならぬ、身のいたづらになりぬ
 べき程のきざなるべくば、事なきさまに言ひなし、たはぶれにもて
 なして、おとなしがるべきなり。況や我が使はむ人のあやしから
 むために、今、せがみさいなむ事、いとみぐるしかるべし。
 (可專思慮事)

一〇 月は世々の形見

室鳩巢

室鳩巢 名は直清。徳川幕府の儒官。江戸の人。享保十九年(三三)歿。年七十七。



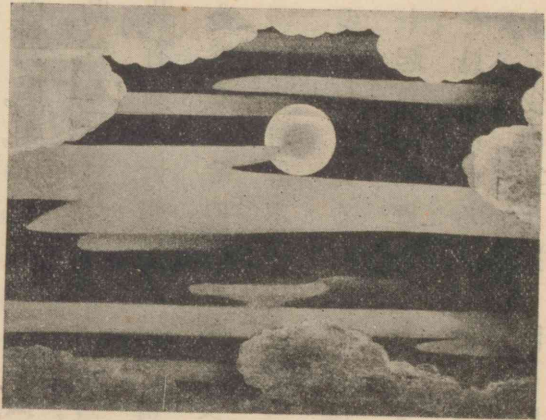
青天有月云々 詩題は「把酒問月」である。

今年もはやなかば過ぎぬれば、いつしか秋の氣色たちて、をぎ吹く風も身にしむ頃なり。「久しく翁のがり行かねば、この程の老のねざめも覺束なし。いざ訪ねとはむ。」とて、或夕暮に例の人々うち連れて來しが、「またも參らむ。」とて歸らむとせしを、翁とさめて、「今宵は月もよし。薄酒すゝめ奉らむ。しひてとまり給へ。」と言へば、翁の心をいかで背くべき。さあらば。」とて、各座をしめて、清談の露やうく繁き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでにあるじまうけし、肴取りそへて、杯いだしけり。諸客皆ゑひて、興に入るとぞ見えし。そのうちに一人杯をとさめて、「青天有月來幾時。我今停杯一問之。」と、李白が詩を高らかにうち吟じけるを、また一人傍よりつけて、「人攀明月不可得。月行却與人相隨。」と歌ふ。また

姮娥

大かたは云々 大かたは月をもめでしこれこの積れば人の老となるもの。 (在原業平、古今集)

外の人々たがひに唱和して、その次を「皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發。」と歌ふ。またその次を「但見宵從海上來。寧知曉向雲間沒。」と歌ふ。またその次を「白兔搗藥秋復春。姮娥孤棲與誰隣。」と歌ふ。その次よりは翁も助音して「今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共看明月皆如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏。」と歌ひをさめけり。その後數獻に及びて、玉山たふるゝばかりに見えけり。さて翁言ふやう「大かたは月をもめでし」とは詠みたれども、老の心も、月見るにぞ慰み侍る。されど、それにつきて、千載無窮の感も起りぬれば、うべ、月を「人の老となる」とも言ふべかめり。但し、月を見るにいろくあり、今思ひいだし侍り。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、獨り隅に向ひてあたりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくくくと見て、「月は徑幾尺かあるべき。各考へて見給へ。」と言ふ。また同じやうの人かたへより、「あれはものの切口と



月明 (堅山南風筆)

見ゆ。奥へ長さいか程かあらむ。』とて、たがひに僉議しけるを、聞く人々みな舌を食ひけり。翁も幼心にをかしかりき。今思へば、世俗月を賞して、光の明きを誇り、影の清きにめでて、良夜とてたゞうち寄り、もの食ひ酒飲みなどして、歌ひのゝしるを樂しみとするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。また騷人墨客の月を詠めて、字毎に金玉を雕り、句毎に錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、それまたゞ景氣の上を翫ぶばかりにて、月に深き感ある事を知らぬなるべし。

翁が千載無窮の感と申すは、我がともがら古人を慕ひて、その書

皇軍萬歳
皇軍萬歳

李白

支那唐代の詩人。寶應元年(西紀表)歿。年六十二。

杜甫

詩人。李白と同時代の人。大曆五年(西紀七〇)歿。年五十九。

楚辭

支那楚の屈平及びその門下後輩の辭賦を後漢の劉向が編輯したもの。

屈子

名は平。支那戰國時代楚の國の人。

を読み、その心を知りつゝ、常に世をへたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照し來て、今にあれば、古人の形見とも言ふべし。されば、月に對して昔をしのびては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月はもの言はねども語るやうにも覺え、忘れては昔の事を問はまほしくも思ふぞかし。今李白が詩、月の景氣を棄てて、一氣に古今を洞觀して、『青天有月來幾時。』といひ出づるより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事からにあらざり。昔より李杜とて、杜甫が上に稱するも、ことわりにてこそ侍れ。然れども、李白が詩も古今流水の如きを感じるまでに、後代を待つ心は見えず。翁昔楚辭を讀みて、『往者余不及。來者吾不聞。』といふに至りて、屈子が心をおしはかりつゝ、感にたへずなむ覺えき。この二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠に我が心を得たれば、あはれ一度あうて語らうてと

思へど、その世に及ばねばかなはず。また末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらめと思へど、その人を聞かねば、誰とか知らむとぞ。これなむ屈子に限らず、古今心あるきは、大方この憾なきにしもあらず。翁もこの心にして月を見るにや、いと感深く覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、何れの世にか、また我が如く月に對して、今をしのぶ人もやあらむ。月はさこそその世をも照すらめ。若しあつらへ告げらるゝものならば、月には一言をものこさまじと思ひ侍り。その意を、

月みれば末の世までもしのばれて

みぬいにしへのいとゆかしき

こゝをもて、翁が月に無窮の感ありと言へるを、諸君考へ見給へ。いはれなきにはあらず。」

(駿臺雜話)

二 光 あ れ

姉 崎 嘲 風

姉崎嘲風
名は正治。文學博士。東京帝國大學名譽教授。宗教哲學者。京都市の人。明治六年生。

人間はあまりこの世界に慣れすぎた。何物も、今ある如く昔から存し、萬事總べて成り行きのまゝになるものとして敢て怪しまず、その日くを過す。

兒童は世界新來の客として、驚異の目を瞠つて事々に疑問を起し、何者に對しても起原或は聯絡の説明を求めるが、それも次第に世に慣れ、漸次に説明をつけて、終には疑ひをも起さず、好奇心をも動かさなくなる。然るに若し人あつて、俄にこの世に生れ、而も成熟した心を以て四圍の世界を觀、人生の事を考へたならば、世界の一事一物、皆驚歎の種となり、疑問の材料となるに違ひない。その疑問に對して、今日の科學はそれく説明を與へはするが、さて萬事萬物の究竟起原となれば、無始無終といふより外はない。

創世記
舊約全書の中に
ある。

進化論で説明しても、その至極の始めは、終に混沌の闇に入らざるを得ない。こゝに於てか、我等の想像力は、大能の神靈が世界を創造する始めといふ事を想はしめる。ユダヤ神話創世記の開卷はこの想像を述べて曰く、

「始めに神天地を造り給へり。地は形なくして空しく、闇淵の面にあり。神の靈、水の面を覆ひたりき。」

萬有渾沌として、天地は一の闇の中に閉ぢられ、水とも雲とも分かぬ濛氣が全宇宙を籠めて居た。そこへ、闇の中に、

「神、光あれ。」と宣ひければ光ありき。神は光と闇とを分ち給へり。夕あり、朝あり、これ首の日なり。」

嗚呼、この一言ほど有力な又不思議な言葉が他にあらうか。一言で常闇の天地に光明が生じ、未來億萬年に互るべき晝夜の區別が出来た。それから、神が「水あれ」と云へば、水が出来、天の大空と地

の大海とが二つに別れ、又神が土といひ、青草といひ、鳥を呼び、獸を呼べば、一切萬物がその聲に應じて生ずる。かくして天地と萬物とが成り立つたと云ふ。

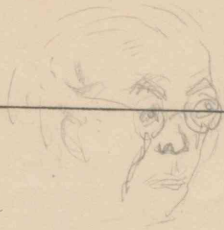
これは神話であり、想像である。従つて萬物成立の説明としては、我々の理性には合はない。併し、理性的説明のみが唯一の解釋であるとはいへず、又宇宙の始めのみが「光あれ」の言に發したとする要はなく、かくの如き創造の事實は、我々の生活に於て日々に經驗し得ることではなからうか。

人の心は物に引かれ、事に動かされ、四圍と共に變じ、事情に隨つて推移して、止る所を知らず。見る物、聞く事、一として全然自分で支配し得るといふものはない。その上、思ふ事、欲する所も、變轉もすれば突發もする。由つて來る所を知らず、落着く先も、自分ながらに測り得ない。意馬は隠見し、心猿は跳梁する。若し自然に任

意馬心猿

人向の情
意馬心猿
ニシテ

物止と動
イテ



せるならば、吾等の心は亂雜變轉の世界に彷徨する外なく、唯現在
 刹那の意識は明らかでも、その前後左右は混沌の大漠に没する外
 ない。然るにそこに何か心を統御するに足る觀念が浮び、又は精
 神の底に透徹する靈感に接し、或は一生を支配すべき理想を體得
 すれば、混沌の闇は觀念理想の光明に破られ、精神の世界は靈の朝
 ぼらけに目がさめる。かくの如き精神の靈感は、聲こそなければ、實
 に「光あれ」の天籟にも比すべき創造力を發揮して、今まで意馬心猿
 の跳梁に委せた混沌は、光あり、力あり、一貫の命ある宇宙となる。
 かく觀じ来れば、創世記の空想は單に世界萬物の始めを説いたも
 のでなく、刹那々々の我等が心にも起るべき大創造を描き、我々各
 個の心靈が發揮し得べき原造の事實を示したものである。
 浮世の紛々たるに心亂れ氣濁つた時、我が心にかくすべしとの
 決斷を得たならば、これ世務の混沌を照す光でないか。天地萬象

を研究し、難題疑問の中に針路を失つて五里霧中に彷徨する際、一
 條の理路を發見し、快刀亂麻を斷つて眞理の光明に逢着するも、亦
 「光あれ」の不思議であるまいか。若しくは又、藝術家が、天然人事の
 中に美の靈を捕へ得て、畫帖の上に、又は木石の中に、之を表現する
 時、「光あれ」の創造力を示すではないか。音樂家が天來の音に心耳
 を澄してこれを樂譜に捕へるのも、詩人が靈感を歌ひ出すのも、亦
 「光あれ」の一聲、混沌の世界を破るに等しいものがあるであらう。
 精神の創造力、これいつまでも正體のとははれない不思議であ
 るが、而も亦實に人生に於ける高き貴きゆかしき生命の源泉であ
 る。萬物の生々を貫いて生命あり、世事の紛々を超えて光明ある
 人生の眞味、人間の眞價値は、一にこの創造力の賜ではないか。特
 に信念生活の力は、紛擾多端、罪障重疊の人生に直入の一路を開き、
 智慧の光で無明の暗を破り、慈悲の暖かみに煩惱の氷も解かず。

道交

攝取の光明といひ、救の恩寵といふも、一にこの小我が宇宙の大神靈と感應道交して、混沌の中に「光あれ」の御言に接する經驗を指すに外ならぬ。

思へば、人生始まつて以來、無常の世相を超えて常住の光明に浴し、破綻百出の人生に一貫の理想を發見し、五十年蜉蝣のこの生にも永遠の生命を實にし得た人にして、その信仰開發の大事に際して、混沌の闇の中に「光あれ」の御言に接した思ひをなさなかつた者が、果してあるであらうか。信念の力はこゝにある。人生の價値は、實にかくの如き光明の新生命が齎すのである。「光あれ。」これ單に太初の創世に限らぬ。人生美はしきものあり、眞理に順ふ生活あり、理想の力が現れる處には、「光あれ」の御言が常にきこえ、その不思議の創造力が絶えず躍動しつゝあるのである。

(光あれ)

二三 須磨の秋

紫式部

須磨にはいと心づくしの秋風に、海はすこし遠けれど、行平の中納言の「關吹きこゆる」といひけむ浦波、よるくはげにいと近うきこえて、またなくあはれなるものは、かゝるところの秋なりけり。

御前にいと人ずくなにて、うちやすみ渡れるに、ひとり目をさまして、枕を敲てて四方の嵐を聞き給ふに、浪たゞこゝもとに立來る心地して、涙落つとも覺えぬに、枕浮くばかりになりけり。琴をすこしかきならし給へるが、われながらいと凄う聞ゆれば、弾きさし給ひて

こひわびて鳴く音にまがふ浦波は

おもふかたより風や吹くらむ

三 須磨の秋

紫式部 藤原爲時之女、一條天皇(天曆)の頃の事、入(一七)の頃の事、心づくしの秋風、云々、木の間に漏りくる月のかげ見れば心づくしの秋は來にけり、(讀人しらす)古今集、行平、姓は在原、阿保親王の第二子、關吹きこゆる云、旅人は秋涼しくなりけり、關吹きこゆる須磨の浦風、(在原行平、續古今集)、枕浮くばかり云、ひとり寝の床にたまれる涙には、石の枕も浮きぬべらなり、(古今六帖)

七九

人々の語り聞えし海山云々
「源氏が俗にいふおこりの病で北山に詣でた時、人々國々の勝景を語りあつた話」
（源氏物語、若紫の巻にある）
千枝
常則
姓は飛鳥部、古今著聞集に繪巧であつたことが出てゐる。

と歌ひ給へるに、人々驚きて、めでたう覺ゆるに、忍ばれて、あいなう起きるつゝ、鼻を忍びやかにかみわたす。
げにいかに思ふらむ。わが身一つにより、親はらから、片時立離れがたく、ほどにつけつゝ、思ふらむ家を別れて、かく惑ひあへるとおぼすに、いみじくて、いとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむとおぼせば、晝はなにくれとたはぶれ言打宣ひまぎらはし、つれづれなるまゝに、いろくゝの紙をつぎつゝ、手習をし給ひ、珍しき様なる唐の綾などに、さまざまの繪どもをかきすさび給へる屏風のおもてどもなど、いとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有様を遙に思しやりしを、御目に近くてはげに及ばぬ磯のたゞずまひになく書き集め給へり。「この頃の上手にすめる千枝常則など召して、作繪仕うまつらせばや。」と心もとながりあへり。なつかしうめでたき御有様に、世の物思ひ忘れて、近う馴れ仕うまつる

紫苑色

拾骨

黒木

紫苑と云ふ植物の色

拾骨

黒木

を嬉しきことにて、四五人ばかりぞつと侍ひける。
前栽の花いろくゝ、咲きみだれ、おもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひて、たゞずみ給ふ御様のゆゝしうきよらなるに、とろがらは、ましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよやかなる、紫苑色など奉りて、こまやかなる御直衣、帯しどけなく打亂れ給へる御様に、釋迦牟尼佛弟子」と名のりて、ゆるゝかに讀み給へる、また世に知らず聞ゆ。沖より、舟どもの唄ひのゝしりて漕ぎ行くなども聞ゆ。ほのかにたゞ小さき鳥のうかべると見やらるゝも、心ぼそげなるに、雁の連ねてなく聲、梶の音にまがへるを打眺め給ひて、御涙のこぼるゝをかきはらひ給へる御手つき、黒木の御數珠にはえ給へるは故郷戀しき人々のこゝち、みな慰みにけり。

(源氏物語)

本居宣長
號は鈴屋。國
學者。伊勢國(三
重縣)松阪市の
人。享和元年(一
八〇一)歿。年七十
六。

源氏物語

五十四帖。一條
天皇の時(一〇六
七)紫式部
の著した小説

日本紀

日本書紀。三十
卷。養老四年(一
七二〇)舍人親王が
撰した。

繪合の卷

源氏物語の第十
七帖

竹取の翁

竹取物語の讃岐
造鷹。

宇津保の俊蔭

宇津保物語(二
十卷)中の仲忠
の祖父

延喜

醍醐天皇の御代
(一五〇一—一五二一)

一三 源氏物語論

本居 宣長

中むかしのほど物語といひて、一くさりの書あり。物語とは、今の世に「はなし」といふことにて、すなはち昔話なり。日本紀に「談」といふ文字をぞ、ものがたり」と訓みたる。そを書に名づけて作れることは、繪合の卷に、物語のいできはじめの祖なる竹取の翁に、宇津保の俊蔭を合せてとあれば、此の竹取やはじめなりけむ。其の物語、誰が何時の代に作れりとはさだかには知られねども、いたくふるき物とも見えず、延喜などよりはこなたの物とぞ見えたる。其の外かのたぐひなる古物語ども、此の源氏のよりさきにも、かずかず多くありしと聞えて、其の名どもあまた聞えたれど、後の世には傳はらぬぞ多かめる。又同じころ、それより後の物も多くして、今の世にも、これかれとあまたのこれり。榮華物語の煙の後の卷に、

榮華物語

系圖と合せて四
十一卷。著者未
詳。宇多天皇か
ら堀河天皇に至
る十五代二百餘
年間の歴史物
語。道長の榮華
を主題とせるに
より、榮華物語
といひ、又一に
世繼物語ともい
ふ。

の後の卷

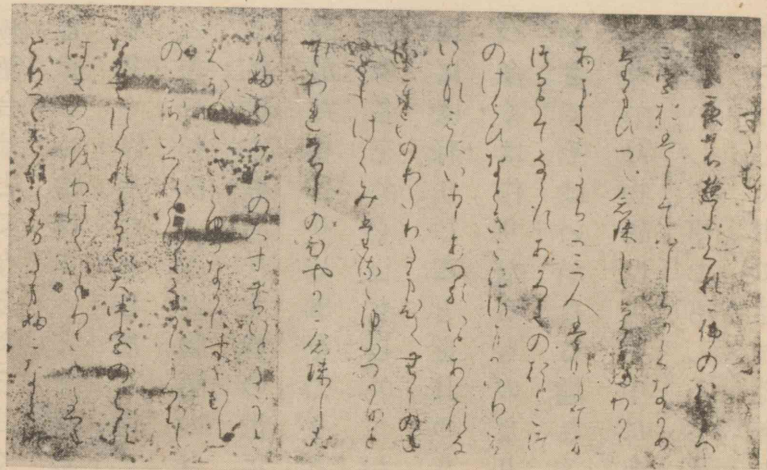
榮華物語の第三
十七卷。

「物語合せとて、今あたらしく作りて、左右かたわきて、二十人合せな
どせさせ給ひて、いとをかしかりけり」といへるを見れば、其のころ
も多く作りたりしなり。

さてもろくの物語のさま、おのく少しづつかはりてさまざま
まなれども、何れも昔の世にありし事を語る由にて、あるはいさゝ
かかたち有りし事をよりどころにして、作りかへても書き、あるは
其の名をかくしもし、かへもして書き、あるはみながら作りもし、又
稀には有りしことを其のまゝに書けるもありて、様々なる中に、ま
づ多くは作りたるものなり。

バクエロ
さてそはいかなる趣なる物にて、何のためによむものぞといふ
に、大かた物語は、世の中にありとある、よき事あしき事、めづらしき
事をかしき事、おもしろき事、あはれなる事などのさま、くを書き
あらはして、其のさまを繪にもかきまじへなどして、つれづれなる

十五夜のゆふぐ
に宮おはして、
はしちかうなが
め給ひつゝ念珠
あまたまふわか
人花たてまつる
とて、ならすあ
かづきのとおと
づのけはひなど
きはりたるいと
みはにそきあへ
るに、例はれな
り給へてむしの
ねいと、しげう
だるゆふべか
なると、わかれ
しとびや、か念
珠したまふ。あ
みだのたふとく
のなかに、すこ
しなかに、すこ
となきなかに、
松蟲のなむすぐ
のをはるけきの
をわけていとわ
づとたづねとせ
つゝはなせ給
ふになど。



源氏物語繪詞

ほどのもてあそびにし、又は心のむすぼほれて物おもはしきをりなどのなぐさめにもし、世の中のあるやうをも心得て、ものあはれをもしるものなり。すべてあはれといふは、もと見るもの聞くもの、ふるゝ事に、心の感じて出るなげきの聲にて、人は、何事にまれ感ずべき事にあたりて、感ずべき心を知りて、感ずるものあはれを知るといふなり。こゝらの物語書どもの中に、源氏物語は、殊にすぐれてめでたき物にして、大かたさきにも後にもたぐひ

狭衣
狭衣物語。四卷。
作者未詳。

なし。まづこれよりさきなる古物語どもは、何事もさしも深く心をいれて書けりとしも見えず。たゞ一わたりにて、あるはめづらかに興ある事をむねとし、おどろくしきさまの事多くなどして、何れもく、物のあはれなるすぢなどは、さしもこまやかに深くはあらず。又これより後の物語どもは、狭衣などは、何事もはら此の物語のさまをならひて、心をいれたりとは見ゆるものからこよなく劣れり。其の外もみな異なることなし。

たゞ此の物語ぞこよなくて、殊に深くよろづに心をいれて書ける物にして、すべての文詞のめでたきことは、更にもいはず、世にふる人のたゞずまひ、春夏秋冬をりく、の空のけしき、本草のありさまなどまで、すべて書きざまめでたき中にも、男女、其の人々のけはひ心ばせを、おのくことくに書き分けて、ほめたるさまなども、皆其の人く、のけはひ心ばへにしたがひて、ひとやうならず、よく

分れて、うつゝの人にあひ見る如く、おしはからるゝなど、おぼるげの筆の、かけても及ぶべきさまにあらざ。さて又よろづよりもめでたきことは、まづからぶみなどは、世にすぐれたりといふも、世の人の事にふれて思ふ心のありさまを書けることは、たゞ一わたりのみこそあれ、いとあらく浅きものなり。すべて人の心といふものは、からぶみに書けるごと、ひとかたにつきぎりなるものにはあらず。深く思ひしめる事にあたりては、とやかくと、くだしくめしく、みだれあひてさだまりがたく、さまたまのくま多かるものなるを、此の物語には、さるくだしくしきくま、くまで、のこるかたなく、いとくはしく、こまかに書きあらはしたること、曇なき鏡にうつしてむかひたらむが如くにて、大かた人の情のあるやうを書けるさまは、やまともろこし、いにしへ今ゆくさきにも、たぐふべき書はあらしとぞおぼゆる。

又すべて卷々の中に、めづらしくおどろしく、めさむるやうの事は、をさくなくて、はじめよりをはりまで、たゞ世のつねの、なだらかなる事の、同じやうなるすぢをのみいひて、いと長き書なれども、讀むにうるさくおぼゆることなく、倦むことはなくて、たゞつづきゆかしくのみぞおぼゆるかし。おのれ教子どものために、はやくより、此の物語を、讀みときてきかすること、あまたかへりになりぬるを、あだし書どもは、かばかり長からぬだに、説くに倦む心もまじるを、これはさしも長き書にて、年月をわたれども、いさゝかも倦むこゝろいで、こず、度毎に、はじめに讀みたらむこゝちして、めづらしくを、かしくのみおぼゆるにも、いみじくすぐれたるほどは、知られて、かへすくめでたくなむ。

(本居宣長全集)

吉田兼好

姓は卜部。文學者。歌人。正平五年(1170)歿、年六十八。

一四 徒然草抄

吉田兼好

一萬事は皆非なり

名利みやうりに使はれて、しづかなる暇なく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。財多ければ身を守るに貧まじし。害を買ひ、煩わづらひを招くなかだちなり。身みののち後には金をして北斗ほくとうをさふとも、人の爲ためにぞわづらはるべき。

愚かなる人の目を歡よろこばしむる樂たのしび亦あぢきなし。大なる車、肥こえたる馬、金玉の飾も、心あらむ人はうたて愚かなりとぞ見るべき。金かねは山に捐たまへ、玉は淵ふみに投なぐべし。利にまどふは、すぐれて愚かなる人なり。うづもれぬ名を長き世に残さむこそ、あらまほしかるべけれ。位高くやむごとなきをしも、勝れたる人とやは云ふべき。愚かに

名利 名用利致なをりよ書を買ひ云々

「不ふ懐くわい實じつ以もつ買かひ」

「書しよ分ぶん不ふ飾しやく表へい以もつ招まう累るい」

「白氏文集」

金は山に捐たまへ云

「賤せん奇き麗れい而に不ふ珍ちん捐けん金かね於お山やま沈しん珠しゆ於お淵ふみ」

吉田兼好

姓は卜部。文學者。歌人。正平五年(1170)歿、年六十八。

一四 徒然草抄

吉田兼好

一萬事は皆非なり

名利みやうりに使はれて、しづかなる暇なく、一生を苦しむるこそ愚かなれ。財多ければ身を守るに貧まじし。害を買ひ、煩わづらひを招くなかだちなり。身みののち後には金をして北斗ほくとうをさふとも、人の爲ためにぞわづらはるべき。

愚かなる人の目を歡よろこばしむる樂たのしび亦あぢきなし。大なる車、肥こえたる馬、金玉の飾も、心あらむ人はうたて愚かなりとぞ見るべき。金かねは山に捐たまへ、玉は淵ふみに投なぐべし。利にまどふは、すぐれて愚かなる人なり。うづもれぬ名を長き世に残さむこそ、あらまほしかるべけれ。位高くやむごとなきをしも、勝れたる人とやは云ふべき。愚かに

自ら賤せんしき位ゐに云々

「老子らうし莊しやう周しゆう吾ご之し師し也なり。親おや居ゐ賤せん職しやく柳りゆう下げ惠ゑ東とう方ほう朔しやく達たつ人也なり。安やす乎や賤せん位ゐ。吾われ豈あ短たん之し哉や」

「文選」

智慧出いでては云

「大道だうだう廢へい有あ仁にん義ぎ智ち者しや出い有あ大だい偽ゐ」

「老子」

眞まことの人は云々

「至いた人にん無な己みづか神かみ人にん無な功こう聖せい人にん無な名な」

「莊子」

拙つたき人も、家いへに生なれ時に遇あへば、高たかき位ゐにのぼり驕おごを極たぎむるもあり。いいみじかりし賢けん人にん、聖せい人にん、自ら賤せんしき位ゐにをり、時に遇あはずして止とみぬる、亦また多おほし。ひとへに高たかき官くわん位ゐをのぞむも次に愚おろかなり。智慧ちゐと心こゝろとこそ、よに勝かちれたる譽うたも残のこさまほしきをつらく思おもへば、譽うたを愛あいするは人の聞きを喜よろこぶなり。譽うたむる人にん、毀こる人にん、ともに世よに停とらず。傳つたへ聞きかむ人にん、又また々また速すみに去いるべし。誰たれをか恥はぢ誰たれにか知しられむ事を願ねがはむや。譽うたは又また毀この本もとなり。身みののち後のちの名なのこりて更さらに益えきなし。是こゝろを願ねがふも次に愚おろかなり。たゞし強つよひて智ちを求め賢けんを願ねがふ人の爲ために言いはば智慧ちゐ出いでては偽ゐあり、才能たうねいは煩わづら惱なの増ま長ながせるなり。

傳つたへて聞きき、學まなびて知しるは實じつの智ちにあらず、いかなるをか智ちと云ふべき。可た不可たは一いっ條じょうなり、如何いかなるをか善ぜんと云ふ。眞まことの人は智ちも無なく、徳とくも無なく、功こうも無なく、名なも無なし、誰たれか知しり誰たれか傳つたへむ。これ徳

を隠し愚を守るにあらず。本より賢愚得失の境に居らざればなり。迷の心をもちて名利の要を求むるに斯くの如し。萬事は皆非なり。云ふに足らず願ふに足らず。

二 大事を思ひ立たむ人

大事を思ひ立たむ人は、去り難く心に懸らむ事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばし、この事果てて、同じくはかの事沙汰し置きて、しかぐの事、人の嘲やあらむ、行くすゑ難なく認め設けて、年頃もあればこそあれ、その事待たむ、ほどあらじ、物騒がしからぬ様になど思はむには、えさらぬ事のみいと重なりて、事の盡くる限りもなく、思ひ立つ日も有るべからず。おほやう人を見るに、少し心ある際は皆このあらしにてぞ一期は過ぐめる。近き火などに遁ぐる人は、しばしとや云ふ。身を助けむとすれば恥をも顧みず、財をも捨てて遁れ去るぞかし。命は人を待つ物か

は。無常の來る事は、水火の攻むるよりも速に、遁れ難きものを、その時老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情、捨て難しとて捨てざらむや。

三 寸陰をしむ人なし

寸陰をしむ人なし。これ能く知れるか、愚かなるか。愚かにしておこたる人の爲にいはば、一錢かるしといへどもこれをかさぬればまづしき人をとめる人となす。さればあきびとの一錢をしむ心切なり。刹那覺えずといへども、これをはこびてやまざれば命を終ふる期たちまちにいたる。されば道人は遠く日月をしむべからず。只今の一念むなく過ぐる事をしむべし。もし人來りて、我が命あすは必ず失はるべし。とつけ知らせたらむに、けふの暮るゝ間、何事をか頼み何事かをいとまむ。我らがいけるけふの日、なんぞその時節に異らむ。一日のうちに、飲食便利

睡眠言語行歩、やむことをえずしておほくの時をうしなふ。そのあまりのいとまいくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益の事をいひ、無益の事を思惟して時をうつすのみならず、日を消し月をわたりて一生を送る、尤も愚かなり。

四 さしたる事なくて

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬ事なり。用有りて行きたりとも、その事はてなば、とく歸るべし。久しく居たるいとむつかし。人と對ひたれば、言葉おほく身もくたびれ心もしづかならず、萬づの事さはりて時をうつす。たがひのため益なし。厭はしげに云はむもわるし。心づきなき事あらむ折は、中々その由をも云ひてむ。同じ心に對はまほしく思はむ人の、つれづれにて、「今しばし、今日は心靜に。」などいはむは、この限りにはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。

阮籍 晉の人。竹林七賢の一人。青き眼云々。「阮籍字嗣宗。不拘禮教。能爲青白之眼。對之。及嘗喜來弔。籍作白眼。喜不憚而退。喜弟康聞之乃齋酒挾琴造焉。籍大悅乃見青眼。」(晉書)

安倍能成

哲學者。京城帝國大學教授。松山市の人。明治十六年生。

一五 行と

觀

安倍能成

歐羅巴に居た一年餘りは、その全體が固より旅であつたが、その旅の中にも私は努めて旅をした。いはば「旅中旅」を絶えずやつて居た。それには一年餘りと限られた期間一所懸命に本を讀んだ所が知れたものである。それよりは日本に居てはどうしても接することの出来ない歐羅巴の自然や都市や藝術を見た方がいふといふ判断も勿論あつたが、併し、それよりも更に有力な理由は自分が旅が好きだ、いやもう少し適切には旅の心を喜ぶ人間だといふことにある。

併し、こゝに斷つておかねばならぬことは、旅とは一人旅のことである。旅の心は一人旅でなければ味ははれないといふのは、少くとも自分にとつて眞實である。固より自分は愛する者や、心置

静證

静證

きない友達と一緒にする旅を喜ばぬ者ではない。併し、かういふ旅も自分にとつては、精々一週間位でよい。長く續けて味の深くなりまさるのはどうしても一人旅である。かくいつたからとて私の旅は、慕ひよる子供を投げつけたまゝ、一生を雲水に託した西行法師の様な出家の旅でもない。若し捨身出家の人が、彼の旅の心を語つて、私の旅などは好い加減なものだといふならば、私は彼等の知る特殊な體驗に敬意を表して口を噤むより外はない。けれどもそれは又、私が私一己の旅の心を語ることを妨げる何物でもないのである。

旅の世界は遂に行の世界ではなくて、観の世界である。私はこの観の世界に闖入してその静謐と純粹とをかきまぜる行のわづらはしさを好まぬ故に、一人旅を好むのである。行は我を執つて、人や物に働きかけてゆかうとする。観は我を空しうして人や物を

包攝

包攝

煉獄

煉獄

受けようとする。固より行も人を相手にしながら天を相手にしてゐる様な上乘なものになつたならば、青筋立つた我を執るといふことはなく、そこに観の自由を包攝し得るであらうが、我々の日常の行の世界は、どうしてもこの小我と小我との角突き合から來る煩はしさを脱却するわけに行かない。私はこの世界を逃避することの出来ないといふことを知つてゐる。又徒らに逃避すべきでない事も知つてゐる。それは我々にとつて通り抜けねばならぬ煉獄である。人間は、或意味からいつてこの我を執り通すことによつて初めて、この我から脱却し得るのであらう。好い加減に我を棄てた。若しくは棄てたと思つてゐる人間程影の薄いものはない。けれども我々がいや／＼ながら置かれた人間的交渉、醜い小さい我に執する醜い小さい行、さうしたものから暫くでも脱却する道を知らなかつたら、我々は遂にその中に墜

息してしまふであらう。我々はこのむさ苦しさから救はれる爲に觀の世界を有しなればならない。我々がこのむさ苦しさの中に齟齬することばかりを深刻だと思つたり、切實だと思つたりするのは一の迷妄である。我々は、我々の行の居場所を知つてそれを定位する爲にも、實に觀の世界を必要とする。けれども我々は、否私は、かゝる理由を意識することによつて觀の世界を求めたのではない。人間は一般に既に本能的にも多少の相違こそあれ觀の世界を求めずには居られない。殊に私自身に就いていふならば、私は色々な理窟を抜きにして、この靜觀の境を求めて居ることが事實である。今少し詳しくいふならば私はかゝる境地に多大の誘惑を感じ、動もすればそこに止り切りに止りたいと願ふまでの傾向を有して居ることを告白しなければならぬ。

私にとつては旅は行の世界からの休養である、又人間的交渉からする息つきである。前にもいつた様に、私の旅の技巧は一向進歩しなかつたけれども、旅の心の持方に於ては一年の外國旅行によつて多少の進歩があつた様に思ふ。私は日毎もしくは週毎に變る異國の所々に於て、幸に多くは楽しい靜な心持を失はずに居ることが出來た。それは威張らず又いぢけずに靜に人や物に對し得ることである。威張る時は人に働きかけるが、その働きは必ず何等かの働きかけられを前提して居るから、こちらの氣持は靜である事は出來ない。いぢける時の心持は、他から壓迫せられて自分の心が主を失つた時であるから、固より平靜の保ちやうもない。私はたまに大きなホテルにはいつて、滿堂の視線が自分の風體や舉動の無様に向けられて居るやうに想像する時、いぢけて固くなる。そこへいつては私の旅の修行などはまだあやふやなもの

エピクロス
ギリシヤの哲學者
(西紀前三二一—
二七〇)。

のであつた。エピクロスは幸福を心の靜平に求め、さうしてそれを得る方法を、要求を、少くすることに求めた。私の旅に居て幸福ならんとする修行も亦この古代末の賢人エピクロスの道を學んだのであつた。然しこのことは私にはあまり苦勞なしに出来る。家に居ても多少はさうであるが、人の家に居ると私は殊に努めずして求める所が少くなつて来る。殊に知らぬ異國を旅する時、私はなるべく人情を求めまいとした。人情と直接する煩はしさを避けようとした。これは私の不平を少くすると共に、私をして求めずして受け得た人情を意外の獲物の如く有難がらせてくれた。人はよく文明が總べてのものを職業化することを悪くいふが、私は文明が色々なものから人情の景物を取つてくれることを、或點では感謝して居る。固より向うが心から與へてくれるものを徒らに避

危惧

けるにも及ぶまいが、與へさうもないものにこれを求める事は愚かな事である。

けれども私がかうして旅の心の靜な幸福を楽しみ得たといふことは必ずしも喜ぶべきことばかりとはいへない。それは私の感じが鈍い、取分け特殊に對し差別に對する感じが鈍いことから来るのではないか、といふ危惧が私の中にある。心の平靜はいへけれども、不安を感じずる程、平靜を保ち得ない程、心身を震撼される程、ある特異を感じ得ないことは、物足らず思はれる。その上、私がかうした旅の境涯に居ると、一方には自分の働きかける世界、自分の仕事の世界の苦しさを避けて、この靜平と愉悅とにいつまでも浸つて居たいといふ惰性の誘惑を感じずる、さうしてそれに次で自分の仕事の世界の乏しさをさびしく思つて来る。所詮私はまだ旅に安んじおほせる身上でない。

(青丘雜記)

宇多の松原
今の高知縣香美
郡赤岡町に在
る。

かくて宇多の松原を行きすぐ。その松の數いくそばく、幾千年
経たりと知らず。もとごとくに浪打寄せ、枝ごとに鶴ぞ飛びかふ。
おもしろしと見るにたへずして、舟人の詠める歌、

見わたせば松のうれごとくにすむ鶴は

とや。この歌は所を見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕ぎ行くまにく、山も海もみな暮れ、夜ふけ
て、西東も見えずして、天氣のこと楫取の心にまかせつ。

海 路

同じ所
室津の湊。
深崎
御崎とも書く。
高知縣安藝郡室
戸崎。

十六日。風浪やまねば、なほ同じ所にとまれり。たゞ海に波な
くして、いつしか深崎といふ所渡らむとのみなむ思ふを、風波とも
にやむべくもあらず。或人の、この波たつを見てよめる歌、
霜だにもおかぬかたぞといふなれど

棹は云々
「棹穿波底月。紅
脈水中天。」
(買 島)

十六日。今日なみのなかにはゆきぞふりける。さて舟に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になり
けり。

十七日。曇れる雲なくなりて、曉月夜いとおもしろければ、舟を
出して過ぎ行く。このあひだに雲の上も、海の底も、同じ如くにな
むありける。うべも昔のをのこは、

棹はうがつ波の上の月を、舟はおそふ海のうちの天を
とはいひけむ。聞きさしに聞けるなり。また或人の詠める、

水底の月のうへより漕ぐふねの
さをにさはるは桂なるべし

これを聞きて、或人のまたよめる、

かげ見れば波の底なるひさかたの
空こぎわたる我ぞわびしき

かくいふあひだに、夜やうやく明け行くに、楫取等、黒き雲にはか
に出で來ぬ。風も吹きぬべし。御舟かへしてむ。」といひてかへ
る。このあひだに雨降りぬ。いとわびし。

都がへり

十一日。雨いさゝか降りてやみぬ。かくてさしのぼるに、東の
方に山の横ほれるを見て人に問へば、八幡の宮といふ。これを聞
きて、喜びて人々拜み奉る。山崎の橋見ゆ。うれしきこと限りな
し。こゝに相應寺のほとりに、暫し舟をとゞめて、とかく定むるこ
とあり。この寺の岸のほとりに柳多くあり。或人、この柳の影の
川の底に映れるを見て詠める歌、

さざれ波よするあやをば青柳の

かげのいとして織るかとぞ見る

十六日。今日の夕つ方、京^{みやこ}へのぼるついでに見れば、山崎のたな

十一日

承平五年(五五)

二月

八幡宮
石清水八幡宮。
男山ともいふ。
京都府綾喜郡八
幡に在る官幣大
社。

山崎

山城國(京都府)
乙訓郡大山崎村
に在る。
相應寺
山崎の橋の西に
在つたといふ。

島坂

山城國(京都府)
乙訓郡石塔寺の
南に在る。

桂川

京都市の西南を
流る。

飛鳥川

大和國(奈良縣)
高市郡に在る。

なる小櫃の繪も、まがりの法螺の形もかはらざりけり。「賣る人の
心をぞ知らぬ。」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あ
るじしたり。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よ
りは、くる時ぞ人はとかくありける。これにも、それにも、かへりご
とす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。
桂川月の明きにぞ渡る。人々のいはく、この川飛鳥川にもあらね
ば、淵瀬更に變らざりけり。」といひて、或人の詠める歌、

ひさかたの月におひたるかつら川

そこなる影もかはらざりけり

また或人のいへる、

天ぐものはるかなりつるかつら川

そでをひでても渡りぬるかな

また或人の詠める、

かつら川わがこゝろにも通はねど

おなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けてくれば、ところ／＼も見えず。京に入りたちてうれし。家に至りて門に入るに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。聞きしよりもまさりて、いふかひなくぞこぼれ破れたる。家を預けたりつる人の心も、荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみて預れるなり。さればたよりごとに物も絶えず得させたり。今宵かゝることと、こわだかにもものいはせず、いとはつらく見ゆれど、志はせむとす。

さて池めいて、くぼまり水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりけり。今

生ひたるぞまじれる。大方みな荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく、思ひこひしきがうちに、この家にて生れし女子そんなびの、もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。舟人もみな子抱きてのゝしる。かゝるうちになほ悲しみに堪へずして、ひそかに心知れる人といへりける歌、

うまれしもかへらぬものをわが宿に

小松のあるを見るがかなしさ

とぞいへる。なほあかずやあらむ、またなむ、

みし人を松のちとせに見ましかば

遠くかなしきわかれせましや

忘れがたく、口惜しきこと多かれど、えつくさず。

(土佐日記)

土佐日記
一卷。承平四年
(五十四)著者紀貫
之が土佐守の任
を了へて歸京す
る途次の日記で
ある。本邦紀行
文の濫觴。

増鏡 三卷、二十篇。著者未詳。後鳥羽天皇の即位から後醍醐天皇の御代まで十五代約百五十年間の歴史物語。

かの島 隠岐の島。

元弘三年 紀元一九九三年。

一七 月草の花

増

鏡

かの島には、春來てもなほ浦風さえて浪荒く、渚の水も解けがたき世のけしきにいとゞ思しむすぼるゝこと盡きせず、かすかに心細き御住ひに年さへ隔りぬるよとあさましく思さる。候ふ人々も暫しこそあれ、いみじく屈じにたり。

今年は元弘三年といふ、閏二月あり。後の二月の初つ方より取分きて密教の祕法を試みさせ給へば、夜も大殿籠らぬ日數經てさすがにいたう困じ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方夢現とも分かぬ程に後宇多院ありしながらの御面影さやかに見え給ひて聞え知らせ給ふこと多かりけり。打驚きて夢なりけりと思すほど言はむ方なく名残悲し。御涙もせきあへず、さめざら

源氏の云々 源氏物語の明石の巻に出てゐる。源氏の君が夢に父帝にあはれた話。新發意云々 この話も源氏物語に出てゐる。

ましを。」と思すもかひなし。源氏の大將須磨の浦にて父帝見奉りけむ夢の心ちし給ふもいとあはれに頼しう愈、御心強さまさりて、かの新發意が御迎へのやうなる釣舟も便出で來なむやと待たるゝ心ちし給ふに、大塔宮よりも海士人の便につけて聞え給ふこと絶えず。都にも尙世の中鎮りかねたるさまに聞ゆれば、萬づに思し慰めて關守の打寐る隙をのみ伺ひ給ふに、然るべき時の到れるにや、御垣守に侍ふ兵どもも御氣色をほの心得て靡き仕うまつらむと思ふ心つきにければ、さるべきかざり語らひ合せて、同じ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりてかくろへ率て奉る。いとあやしげなる蟹の釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗き紛れに押出す。折しも霧いみじう降りて行く先も見えず、いかさまならむと危けれど、御心を静めて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹き進みて、その日の申の時に、出雲の國に着かせ給ひぬ。こゝにてぞ人々心

伯耆の國稻津の浦
鳥取縣西伯郡に在る。

ち静めける。同じき二十五日伯耆の國稻津の浦といふ處に移らせ給へり。この國に名和の又太郎長年といひて、あやしき民なれどいと猛に富めるが、類廣く心もさかくしく、むねくしき者あり。彼がもとへ宣旨を遣し給ひたるに、いと忝しと思ひて取敢ず五百餘騎の勢にて御迎へに參れり。

二

さて都には伯耆よりの還御とて世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて事ども定めらる。二條の前の大臣召ありて參り給へり。こたみ内裏へ入らせ給ふべき儀、固より御讓位ありしにあらず、璽の箱を御身に添へられたれば、たゞ遠き行幸の還御の儀式にてあるべき由定めらる。關白を置かるまじければ、二條の大臣氏の長者を宣下せられて都の事管領あるべき由承る。天の下た

二條前大臣
藤原道平。前關白。

東寺

京都市下京區に在る。本號は八幡山。教王護國寺なれど、朱雀門の東に在るより俗に東寺と稱す。延暦十五年(西暦)の創建。

だこの御計ひなるべしとて、この一つあたり喜びあへり。

六月六日東寺より常の行幸のさまにて内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言葉なし。去年の春いみじかりしはやと思ひ出づるも、たとしへなし。今も御供の武士どもありしよりはなほ幾重ともなく打圍み奉れるはいとむくつけきさまなれど、こたみは疎ましくも見えず。頼しくめでたき御守りかなと覺ゆるも、うちつけめなるべし。先陣は二條富小路の内裏に着かせ給ひぬれど、後陣の兵は猶東寺の門まで續き控へたりしとぞ、聞えしは實にやありけむ。正成も仕うまつりけり。かの名和の又太郎は伯耆守になりて、それも衛府のものどもに打交りたり。珍しくさまかはりてゆすりみちたる世のけしきかくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りけるにかとめでたきにつけても、猶前の世のみぞゆかしき。車など立ちつゝきたるさまありし御下りにはこよ

なくまされり。物見ける人の中に、

昔だにしづむうらみをおきの海に

波立ちかへるいまぞかしこき

昔の事など思ひ合はするにやありけむ。金剛山なりし吾妻の武士どもも、さながら頭を垂れて参りきほふさま漢の初もかくやと見えたり。

十三日、大塔法親王都に入り給ふ。この月頃御髪おほして、えもいはず清らなる男になり給へり。唐の赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて御馬にて渡り給へば、御供にゆゝしげなる武士ども打圍みて、帝の行幸にもほとく劣るまじかめり。速に將軍の宣旨を蒙り給ひぬ。流されし人々程なくさほひ上るさま枯れにし本草の春に遇へる心ちす。その中に季房の宰相入道のみぞ預りなりけるものの情なき心ばへやありけむ、吾妻のひしめきの紛れ

季房

姓は藤原。後醍醐天皇時代の朝臣。参議に任ぜられた。北條氏の爲、下野國(栃木縣)に流され配所で歿した。

に失ひてければ、兄このかみの中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言、母の尼上など嘆き盡きせず、胸あかぬ心ちしてけり。

四條中納言隆資といふも頭おろしたりし、又髪おほしぬ。固より塵を出づるにはあらず、敵の爲に身を隠さむとて假初に剃りしばかりなれば、今はた更に眉を開く時になりて男になれらむ、何の憚かあらむとぞ、同じ心なるどち言ひあはせける。天台座主にていませし法親王だにかくおはしませばまいとぞ。誰にがありけむそのころ聞きし。

墨染の色をもかへつ月草の

うつればかはる花の衣に

藤井高尙
號は松の屋。國
學者。備中國(岡
山縣)吉備津宮
の神官。天保十
二年(三五)歿、
年七十七。

一八 松の落葉

藤井高尙

一ものしりびと

この書はさらなり、からのにまれ、天竺のにまれ、書をよみあきらめたるを、その道々のものしりびとといふべし。さる人は、あだしびとよりすぐれて、わが世の限りよきことをなさむと、おもひつとむべきことになむ。さいふは、いづれの道も、あしきことなすをいさめ、よきことすべきやうをすゝめをしふる一筋なるに、それをあきらめしり、人のしるべをもするものの、自らはさせざらむは、天地の神いみじうにくみたまひ、とがめたまひ、世の人も、いたくそしるべき事なればなり。まして、あしきことしたらむは、その罪かいなでの人よりは千重まさりなむかし。

二ものまなび

わくらは

いにしへと今とは事ことなることも多かれども、ものしれば、智といふもののほどく、に大きになれば、おもひはかりせまらずして、古かゝりつれば今はかうく、してこそと、なみならぬをかしきかうがへも出で來ぬべく、よき人になるわざにしあれば、上なくたふときものになむ。かくめでたきものなるを、鳥獸はすぐれたるもえせず、わくらはに人と生れて學ばでやはあるべき。しかにはあれども、學びたるがなかく、にしらぬよりはあしきこともあり。おのがものしれる程を見え知られむとして、かりそめのことばにも、人のえ聞き知るまじきことをいひ、おももちけしきほこりに、人をばおとしめなす。こはなまものしりの上にあることにて、いとく、にくげなりかし。

人は心の底つよくて、うはべはものやはらかに、大かたのことは世になびきしたがひて、おのが立てたる趣ありても、あらはにけやけく人と争はず、おもひのどめて、やうくにもものすべくなむ。かく心得て、このまなびに、孔子のをしへをとりそへてもものしたらむには、つゆの難なく、わが身のためはさらにもいはず、世のためにもなることぞかし。ものまなびといふものは、する人の心得によりて、よしあしいたくことなるものになむ。

三 論 語

からぶみの百書千書あるが中に、ひとりぬけ出でていはむ方なくをかしくめでたきは、この論語といふ書なりとこそ思はるれ。さるは、かしこき心のいたらぬ隈なき孔子の身の行と、弟子にをしへていはれたる言とを、しるしたる書なればなり。人の身の行の

論語
孔子が弟子及び
時人に應答し、
又弟子が互に話
した語を孔子の
歿後門人の編纂
したもの。四書
の一。

あるべきやうを、こまやかに教へさとしたるさまは、天地の中にまた類なかりけり。よきすぢとあしきすぢとは、たれも大かたは思ひわくなれど、その中に重さ軽さのある心しらひの、人の知りえがたき境を、残る隈なく、明らかに言ひ教へたる書にぞありける。

おのれ、まだいと若かりし程より、身の行の心得にとて、をりくこの書を読むたびに、その教をげにさることぞと思ひ信じて、いかでいかで、さやうにせばやと志して年経にければ、拙くてなし得ぬものから、わが身の爲となりぬる事の多かるは、たれも同じ事ぞと、人のためをも思ひて、よその國の書なれど、これをよめとはをしへものするになむ。

佐佐木信綱

號は竹柏園。文學博士。歌人。三重縣の人。明治五年生。

一九 萬葉集序説

佐佐木信綱

古來、歌集は多いけれども、その想の純眞、簡素のうち、人心の基調を傳へて、さながら歌の故郷ともいふべく、詩歌の不朽の生命の源泉を爲せるものは萬葉集である。

文選 三十卷。梁の蕭統の撰。梁から周に至る文章詩賦を集む。
淮南子 二十一卷。漢の淮南王劉安の撰。

橘諸兄

奈良朝の歌人。元明、元正、聖武、孝謙の四天皇に歴任し、天平寶字元年(四七)歿、年七十四。

萬葉集といふ名の起りに就いては、萬の世といふ説と、萬の言の葉といふ説と二つある。いづれも當時流行した文選、淮南子等の漢籍中の文字に出たものとされる。兩説のうち、萬の世の方が、支那にも日本にも多く用ひられてゐるので、その方に左祖せられる。なほいま一説には、多くの木の葉の義で、多くの歌を集めた譬喩に用ひたものといふ説がある。

これを撰んだのは橘諸兄とも、諸兄及び大伴家持ともいひ、更に家持の私撰といひ、諸説あるが、吾人の考へでは、全部が一人の手によつて撰ばれたものではなく、數種の集の草稿類があるところ(大

大伴家持

大伴旅人の子。奈良朝時代の武將且歌人。延暦四年(四五)歿。

伴家ならむにあつめられ、そのまゝ一部の書として傳はつたものであらうと思はれる。併し草稿のまゝで精選してないといふところが、歌集であるだけに、少しの障も無いのみならず、却つて當時のいろ／＼の歌風が窺はれて面白いのである。萬葉集が精選を経ずに傳はつたのは、寧ろ吾人の幸福である。草稿だけに、その體裁も或は整ひ、或は整つて居らぬ。卷數二十卷、分類した卷には、雜歌、相聞、挽歌、譬喩、四季雜歌等の目がある。

歌體からいへば、長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首となる。長歌、旋頭歌がかく多くあるのは、この集の特色である。

時代は奈良朝、更に詳しくは藤原朝(持統天皇、文武天皇——二十三年間)、奈良朝(元明天皇以後、淳仁天皇に至る——四十八年間)合計約七十年間を代表し、集中の歌は概ねその間の作で、而も短い藤原朝の

間の作は、長い奈良朝の間の歌に比して数が少からぬやうに思はれる。併し一々の歌に就いては、持統天皇以前の作もかなり有り、最も古くは仁徳天皇允恭天皇雄略天皇時代の作もある。

作者はその名の知られたものと知られないものと相なかばし、知られたものに就いて見るに、上は帝王・皇后・皇族・大官より、下は庶人に至るあらゆる階級の人を含んでゐる。これまた後代の勅撰集に見ぬこの集の特色である。

そのうたはれた題材から見ると、地理的に言へば、北海道を除いて殆ど日本全国にわたつてゐる。大和をはじめ、近畿を中心として、東海・東山・西海・北陸・南海・山陽・山陰諸道の諸國の地名・風土はすべてうたはれてゐる。品物的に言ふと、鳥獸・魚介・草木の類から器・服飾に至る迄すべて取扱はれてゐる。これだけでも萬葉集の歌が當時の人々の日常生活のすべてと交渉して居た事がわかる。

それで後世の歌に見る様な特別の歌題といふものが未だ無かつたので、その歌は孰れも當事の人々の實際の経験と交渉して居る。要するに歌と言へば、特殊の人士が、花鳥風月の風流とか、名所とか、又一定の題目とかによつて、想を構へたものとなつて了つた後世の狭い題詠とはまるで違つて居る。それだけに歌として見て、到底後の歌に見得べからざる面白味がある。

次に萬葉集の奈良朝文化に於ける位置に就いて考へて見よう。奈良朝は、今更言ふまでもなく、わが國の文化史上の黄金時代(もとよりその文化は専ら帝都に限られて居て、範圍の狭いものであつた)であつた。而して丁度現今のわが國が、歐米諸國の文化を採り入れて立派な發達をしてゐるやうに、當時はその頃隆盛の域にあつた支那の文明を採り入れて、光彩まばゆい有様を呈してゐた時代であつた。

この奈良朝の文化が、後代にのこしたほとんど不滅の事業として、萬世に傳へなければならぬものがある。これは一般の文化が進歩した後代、もしくは今後に於ても、永久にその光彩を失はぬのであらうと思はれる。それは何であるか。即ち當時の美術と文學とである。而して文學とは、即ちこの萬葉集の歌である。

奈良に遊んで、千年の風雨に堪へて今なほ當時の偉觀を偲ばしめるところの幾多の建築物彫刻物を觀た人は、我等の祖先が、上世に有した立派な文化にまのあたり接して、一種神往の感に打たれざるを得ぬであらう。而してかの藥師寺の建築彫刻、東大寺の大佛、三月堂の諸像等が出來たと同時代に、萬葉集が生れたのである。萬葉集の作者も、彼等美術家も、共に同時代の人である。彼等によつて實に奈良朝文化は創り出されたのである。しかも更に萬葉集の作者と、彼等美術家とが、それ／＼奈良朝文化について有する

位地と意義とを考へると、大いに異なるものがある。蓋し、彼等美術家達が、國民中の少數者たる天才であり、しかも多くは三韓支那の歸化人、もしくはその子孫であつたのに、彼等萬葉の作者は當時の國民一般であつたといふことである。この點に於て、吾人は萬葉集によつて當時のわが日本國民の感情といひ、氣力といひ、知識といひ、道義的觀念といひ、即ち國民性てふものを、血と肉とに於て感ずることが出来るのである。しかも或はその美しさに於て、或はその雄々しさに於て、或はその敏さに於て、或はその敦厚といふ事に於て、わが上代人の國民性は、歴史上大いに貴しとすべきものであつた。この事は、實に吾人が萬葉集によつて知り得るところであると同時に、その故を以て萬葉集は、實にかの諸美術品にもまして一層貴重なる人間的創作たるを得るのである。萬葉集を有するのは實に我等國民の誇である。

(増訂萬葉集選釋)

二〇 瀧の都

萬葉集

吉野の宮に幸したまひし時によめる歌

柿本人麿
持統・文武の兩
天皇に仕へた歌
人。傳未詳。

柿本人麿

安見しし わが大君の 聞し食す 天の下に 國はしも
さはにあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の國
の花散らふ 秋津の野邊に 宮柱 太しきませば 百敷
の大宮人は 船並めて 朝川渡り 舟競ひ 夕川渡る
この川の絶ゆることなく この山の いや高からし 落ち
たぎつ 瀧の都は 見れど飽かぬかも

反歌

見れど飽かぬ吉野の河のとなめの絶ゆることなくま
たかへり見む

隅知と吾大王と可食天下尔國志思毛澤二
流有山川と清河内臨御心平去野乃國と花
散相秋津乃野邊尔宮柱太敷庄波面磯乃大
宮人志船並六且川渡舟競夕河渡此川乃徑事
奈久此山乃跡馬思良珠水激瀧と宮子波見礼
臨不飽と問

吉野
島
歌

山上憶良
三六頁頭註參
照。

大伴家持
一一九頁頭註參
照。

子等を思ふ歌

山上憶良

釋迦如來、金口に正しく説き給はく、等しく衆生を思ふこと
羅喉羅の如し。」と。又説き給はく、愛は子に過ぎたるは無
し。」と。至極の大聖すら尙子を愛するの心あり。況や世
間の蒼生、誰か子を愛しまざらめや。

瓜はめば 子とおもほゆ 栗はめば ましてしぬばゆ
いづくより 來りしものぞ まなかひに もとなかゝりて
やすいしなさぬ

反歌

しろがねもこがねも玉もなにせむにまされるたから子
にしかめやも

男子の名を振ふを慕ふ歌

大伴家持

ちゝの實の 父のみこと はゝそ葉の 母のみこと おほ

ろかに 心つくして 思ふらむ その子なれやも ますら
 をや 空しくあるべき 梓弓 すゑふりおこし 投矢もち
 千尋射わたし 劍太刀 腰にとり佩き 足曳の 八峯ふみ
 越え さしまくる 心さやらず 後の代の 語りつぐべく
 名を立つべしも

反歌

ますらをは名をし立つべし後の代に聞きつぐ人も語り
 つぐがね

山部赤人

聖武天皇に仕へ
た人。歌人。人
麿と並び稱せら
れる。

山部赤人

和歌の浦に潮満ちくれば 瀉をなみ葦邊をさして 鶴鳴き
 わたる
 朝なぎにかちの音聞ゆみけつ 國野島のあまの船にしあ
 るらし

有間皇子

第三十六代孝徳
天皇の皇子。

有間皇子

家にあれば 筈にもるいひを草まくら旅にしあればしひ
 の葉にもる

志貴皇子

第三十八代天智
天皇の第七皇
子。

志貴皇子

いはばしるたるみの上のさわらびのもえいづる春にな
 りにけるかも

小野老

奈良朝初期の歌
人。

小野老

青丹によし奈良の都は咲く花のにほふがごとく今盛り
 なり

海犬養岡麿

傳未詳。

海犬養岡麿

み民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく
 思へば

久松潛一
文學博士。國文學者。東京帝國大學教授。愛知縣の人。明治二十七年生。

二 古事記と國家的精神

久松 潛 一

「古事記」はわが國の古典中で最も複雑な性質を有してゐて、單一の視點に立つて見ることの困難な作品である。萬葉集や源氏物語の如く、純粹に文學として見ることも元より可能であるが、萬葉集や源氏物語は純粹に文學として見るものが唯一の中心視點であるとも考へられるのに、「古事記」には更に多方面の視點がある。歴史として、古代宗教として、神話として、その他多くの視點がある。かく學問的對象の上で複雑さを有すると共に、「古事記」には少年の胸にも或親しさを與へるものがある。我々は少年の頃、鰐をだました兎が大國主命に救はれた説話を聞いて、深い興味を覺えた。又、素戔嗚尊の八岐大蛇を退治した事件を、さては日本武尊の熊襲征伐や蝦夷征伐やの物語を、どんなに感激を以て聞いたであらう。

かういふ説話は總べて「古事記」に見えるのである。少年の頃には「古事記」に此等の説話があるとは意識してゐなかつたが、我々は「古事記」のもつ素材や内容などは、少年の頃に既に深く腦裏に印してゐたのである。かうして、「古事記」の中には少年時代の夢と憧憬とを十分に満足させるものがあるのである。而も、我々は今日に於て、「古事記」の中に幾多の學問的對象としての問題を見出す。現に、素戔嗚尊とは如何なる神であるか、又八岐大蛇とは何であるかといふ點になると、學問的に見て未だ判然とした解決はついてゐない。即ち少年の心には無心に取入れられた世界も、批評的精神を以て入れば入るほど複雑になるのが「古事記」である。單純なやうで、無限の複雑さを湛へてゐるのが「古事記」である。けれども、複雑ではあるが而もそれを統一する精神を明確に掴むことの出来るのも「古事記」である。

然らば「古事記」の内容は如何なる點によつて統一されてゐるかと言ふに、神と英雄とを中心とした國家的精神によつて統一されてゐると思ふ。元より「古事記」は敘事的な文學であり、客觀的な表現をなしてゐて、主觀的にこの精神が説かれてゐるのではない。皮相的に見れば「古事記」には素樸な原始生活がそのままに現れてゐるに過ぎないやうである。兔と鰐との話、大蛇退治や、兄弟争ひをして海宮に針を取返しに行つた説話など、そこに何うして國家的精神が見られるかと思はれもしよう。勿論その部分的表現の中には國家的精神は殆ど形を見せてはゐないが、その部分が全體として統一される過程に、又統一體の上に國家的精神が見られるのである。更にこれを具體的に考へて見よう。

言ふまでもなく「古事記」には種々の英雄が活躍し、それ等の英雄を中心として事件が展開するのであるが、只一人の英雄によつて

遊離説話

統一されてゐるのではない。又一人の英雄によつて行はれる種の事件も別々であつて、必然的な統一をそこに見出すことは出来ないのである。だから、一々を分解し解剖して行けば、それ等の英雄の姿さへも實在の上からは影の淡くなる場合もある。

併し、その別々となつた所謂遊離説話を組織立てる上に、神——それは國家の最高理想としての神が中心となつてゐる處に、全體が渾然として統一されてゐるのである。即ち我々が「古事記」の統一性を求めて進んで行けば、必ずそこに神があり、國家的精神が中心となつてゐるのを見るのである。「平家物語」を繙けば、その一篇には様々な戦闘や、哀別離苦や、榮枯盛衰の事件などが點出されてゐるが、それを深く追求して行けば、世のはかなさと欣求淨土とに、統一されてゐるやうに、「古事記」の様々な相も、推し詰めて行けば、この神、國家の最高理想としての神へ到達するのである。

さうして、この最高理想としての神は絶対の力を持つものであるが、その力は元より單なる武力ではなく、愛の精神を一方に具へた力である。英雄といふ概念を見ても、單なる武力の持主ではなく、愛がその一面に存するのである。八岐大蛇を征伐した素戔嗚尊も、一方には奇稻田姫との濃やかな愛情を有してゐる。日本武尊にしても、單身敵の陣營に入られたりした勇者でありながら、夫のために命を捨て、荒れ狂ふ海中に身を投じた弟橘姫に對しては、「あづまはや」と無限の感慨を寄せて居られる。又その死に臨まれては、大和の春を回想し、生あるものを讚美して、高らかに歌つて居られるのである。大國主命が出雲民族の偉大なる統一者である他の半面に於て、情味の豊かな神であつたことは、「古事記」の極力描いてゐる所である。かく力と愛との所有者であつてこそ、理想的な英雄であり、神であるのである。更に言ひ得るならば、劍と玉と鏡

叡智

とを以て代表されるところの、強い武力と、なごやかな情愛と、明らかな叡智とこそは、英雄と神との最高の理想であり、又國家の最高の理想である。この最高理想に向つて進むところに、國家の生命は永遠であるのである。さうして、「古事記」はこの力と、愛と、叡智との現れである、人間の最高理想としての神を求めてゐるところに、その窮極の精神があり、理想があり、統一性があると考へられる。それこそは國家の最高理想であると共に、人間の最高理想である。この最高理想を求めて行くところに、國家も人も一體となる。かうして、我々は「古事記」の中から神と英雄と國家と人とが結び着いた、人間の永遠なる姿を見ることが出来るのである。この人間の永遠の姿こそ、單純なる童心に通ずると共に、無限の複雑さを含んでもゐるのである。

而も「古事記」は敘述するのみで、決して説くことをしてゐないの

である。事件を語つてはゐるが、これに就いて主觀的な解釋も詠歎も主張も現してゐないのである。そこに形態としての敘事文學的な性質が見られるがその語られた中から、あらゆるものを酌み取つて明らかにするのが、即ち「古事記」の研究過程である。少年の頃、我々が多大の感興を覺えた素戔嗚尊や大國主命や日本武尊などに對しては、やはり今日でも同じやうな感興を起すのであるが、同時にそこから無限の問題が湧きでて來るのである。さうして、その間から「古事記」の統一性を擷むことは、やがて國家の最高理想としての神を理解することであり、同時に人間としての最高理想をも擷むことであると思はれるのである。

(上代日本文學の研究に據る)

古事記

三卷。太安磨の撰。元明天皇和銅五年(一三三)神田阿禮の口誦に本づいて編述したものと傳へられてゐる。我が國最古の史書。

肥の河
出雲國(島根縣)第一の大川。源を船通山に發し、流れて宍道湖に注ぐ。

高志

出雲國(島根縣)簸川郡古志村及び布智村の邊。

赤加賀智
眞赤な酸漿。

三 須 賀 宮

古 事 記

かれ、やはらえて、出雲の國の肥の河上なる鳥髮とりかみのところところに降りましき。このをりしも、箸その河より流れ下りき。こゝに須佐之男命その河上に人ありけりと思ほして、まぎ上り出でまししかば、翁と嫗と二人ありて、稚女をとめを中に置すて泣くなり。すなはち、汝等なむらは誰ぞ。」と問ひ給へば、その翁、吾は國つ神大山津見神の子なり。あが名は足名椎あしなづち妻が名は手名椎むすめ女が名は櫛名田比賣と申す。」と申す。又、汝の泣く故は何ぞ。」と問ひ給へば、あが女は本より八稚女ありき。こゝに高志たかしの八俣遠呂智やまとなも、年毎に來て食ふなる。今それ來ぬべき時なるが故に泣く。」と申す。「その形は如何さまにか。」と問へば、それが目は赤加賀智あかかかなして、身一つに頭八つ、尾八つあり。又その身に蘿くわまた檜ひのき杉すぎ生ひ、その長さたに籬かき八谷、峽を八尾を互

伊呂勢
「弟」の意

湯津爪櫛
齒の數の極めて
多い櫛。
八入折
極めてよく醸し
た酒。

りて、その腹を見れば、ことごとく、に何時も血あえたゞれたり。」と申す。かれ、速須佐之男命、その翁に、「これ汝の女ならば、あれに奉らむや。」と詔り給ふ。「かしこけれど、御名を知らず。」と申せば、あは天照大御神の伊呂勢なり。かれ、今天より降りましつ。」と答へ給ひき。こゝに、足名椎、手名椎の神、しかまさば、かしこし、奉らむ。」と申しき。

かれ、速須佐之男命、乃ちその稚女を湯津爪櫛にとりなして、御美豆良にさゝして、その足名椎、手名椎の神に告り給はく、汝等は八入折の酒を醸み、又垣を作り廻し、その垣に八つの門を作り、門毎に八つの棧敷を結ひ、その棧敷毎に酒船を置きて、船毎にその八入折の酒を盛りて待ちてよ。」と告り給ひき。かれ、告り給へるまゝにして、かく設け備へて待つ時に、その八俣遠呂智、まことに言ひしがごと來つ。乃ち、船毎におのが頭を垂れて、その酒を飲みき。こゝに

都牟刈
刀の切れ味のよ
い形容。

須賀
出雲國(島根縣)
大原郡海潮村字
諏訪の地。

飲み酔ひて留り伏し寝たり。乃ち速須佐之男命、その御佩かせる十拳劍を抜きて、その蛇を斬りはふり給へば、肥の河血になりて流れき。かれ、その中の尾を斬り給ふ時、御刀の刃かけき。怪しと思ほして、御刀の先もちて刺し割きて見そなはししかば、都牟刈の太刀あり。かれ、この太刀を取らして、怪しき物ぞと思ほして、天照大御神に申し上げ給ひき。こは草那藝の太刀なり。

かれ、こゝをもて、その速須佐之男命、宮造るべきところを出雲の國にまぎ給ひき。こゝに須賀のところ、に到りまして、詔り給はく、「あれこゝに來まして、あが御心すがくし。」と詔り給ひて、其處になも宮造りてましましける。かれ、そこをば今に須賀とぞいふ。この大神、始め須賀の宮造らしし時に、そこより雲立騰りき。かれ、御歌作し給ふ。その御歌は、

八雲立つ出雲八重墻妻ごみに八重墻つくるその八重墻

首
宮の長官。

こゝに、その足名椎神を召して、「汝はわが宮の首たれ。」と告り給ひ、また名を稻田宮主須賀之八耳神とおほせ給ひき。

(古事記に據る)

二三 肇國の理想

中村孝也

中村孝也
文學博士。東京
帝國大學史料編
纂官。歴史家。
群馬縣の人。明
治十八年生。

我が日本國家の有する理想は、高遠にして雄大を極めたものであります。先づ第一に天祖天照大神の神勅を拜讀致しませうか。天照大神は天孫瓊々杵尊をこの國土に降臨せしめらるゝに當り、左の如く仰せられました。

豐葦原の千五百秋の瑞穂國は是れ吾が子孫の王たるべき地なり、宜しく爾皇孫就いて治らせ。行矣。實祚の隆えまさんこと、當に天壤と窮りなかるべし。

豐葦原千五百秋瑞穂國とは、米の生産の豊富なる我が國土の美稱であります。そしてこの國土に君臨すべき主權者として御子孫を指定せられ、その御血統の繁榮を豫言して、天地と共に悠久無限に互るであらうと宣明せられたのは、實に宏大無邊なる大理想の雄麗なる大發現であります。昔支那では夏の禹王が、天下九州に象つて九つの鼎をつくつた。これが帝王傳國の寶器となり、周の成王は、これを祭つて世を卜し、周の王朝は八百年續くであらうと豫言したさうである。何といふ偏狹な豫言であらう。自ら己の生命を八百といふ數字で制限してしまつて居る。我が天祖の大豫言は數字を超越して、悠久無限に互る皇室の繁榮を力強く宣明して居られる。皇室の繁榮は即ち國民の繁榮である。かくして天祖の大理想によつて、我が皇室と國民とは、生々發達の一路を勇ましく進行して今日に至り、また將來永遠に及ばうとして居

祈年祭
古、毎年二月四日神祇官並に國司の廳に於て、大神宮以下の諸社を祭つて風雨の災害なく五穀の豐饒なるやう祈られた儀。

るのであります。

それから毎年二月になると、祈年祭といふ祭典が行はれて、五穀の豐饒を祈るのであります。その時、神前で讀み上げる祝詞は、實に雄渾華麗を極めて居ります。天祖天照大神に對し、次のやうに申し上げるのであります。

辨別ことわきて伊勢いせに坐ます天照大神の大前おほまへに白まさく、皇大神すめみかみの
見霽みはるかします四方よもの國は天あめの壁かべたつきはみ、國の退そきた
つかぎり、青雲せい雲のたなびくきはみ、白雲はく雲のおりる向伏むかひすかぎ
り、青海原せい海原は棹さ梶かぢ干さず、舟の艫への至りともまる極み大海原
に舟滿ふねみちちつゞけて陸くわより往く道は、荷にの緒いと結ゆひかためて、磐いわ
根ね木根履ねねみさくみて、馬の爪つめの至りともまる限り、長道ながぢひま
なく立ちつゞけて、狭さき國は廣ひろく、峻さかしき國は平ひららかに、遠とほき
國は八十綱やそつなうちかけて引寄ひきよすることの如く、皇大神すめみかみのよ

さしまつらば、荷前のさきは皇大神の大前おほまへに、横山のごとく打積

みおきて、残りのこりをば平ひららかに聞きしめさむ。(下略)

この祝詞に現るゝ理想は、世界萬國を包容して尙綽々たる餘裕を示すものであります。蓋し天照大神は太陽神でいらせられる。太陽は世界萬國に照臨して無差別平等に光と熱と生命とを與へ、博大なる恩恵を施します。天照大神は實に日本國民を率ゐて、この世界的なる博愛を宣傳して居られるのであります。この「愛」の力によつて「天の壁立つきはみ、國の退き立つ限り」、「全世界に互つて、海上では、舟の艫の至り留るきはみ、大海原に舟滿ちつゞけて」、「陸上では、馬の爪の至り留る限り、長道ひまなく立ちつゞけて」、狭い國は廣くし、峻しい國は平らかにし、遠い國は八十綱を打掛け引寄せ、四海萬民共存共榮の賑やかな悦ばしい明るい生活を實現しようとするのが、即ち天祖の大理想であつたのです。

出雲風土記
奈良朝の風土記
の現存してゐる
もの一つで、
地理・産物・地名
の起源に關する
傳説の記録であ
る。

さひめ山
今の三瓶山と
はれる。

遠い國は八十綱を打掛け引寄せて、一視同仁、世界的博愛の歡喜の中に入れてやらうといふ理想は、天照大神より出でて遍く國民上下の中に流れ満ち、その一端が出雲風土記意宇郡の條、國引の傳説に現れて居ります。八東水臣津野命が海岸に立つて四方を展望して、出雲の國は小さい國だ。縫ひつけてやらう。」と獨言をいはれます。そして西北の方と、北の方と、東北の方とから、太い綱を以て陸地を縛つて引寄せて來て、今の島根半島の一部をつくります。その有様は、栲衾新羅の三埼を、國の餘りありやと見れば、國の餘り有りと詔りたまひて、童女の胸鉏取らして、大魚のきだつき別けて、旗すゝき穂ふり分けて、三つよりの綱打掛けて、霜つゞらくるやくるやに、河船のもそろく、に、國來、國來と引き來、縫へる國は、去豆のうちたえよりして、やはに杵築の岬なり。かくて堅め立てしかしは、石見の國と出雲の國との界なる、名はさひめ山これなり。

また持ち引ける綱は、そのながはま菌長濱これなり。」といふ風にそれぐ記してあります。

天祖肇國の大理想は、また御歴代の天皇によつて美事に繼承せられて今日に及んでをります。神武天皇より明治天皇に至るまで御歴代の天皇は常に皇祖天神を祭り奉ることによつて、この理想を新たにしつゝ、いらせられます。

恢弘
靈時

神武天皇は、天照大神の理想を繼承し、天業を恢弘し、天下に光宅せんが爲に、九州を出でて大和に入り、その地方を平定して始めて天皇の御位に即きたまひ、即位四年に鳥見山の上に靈時を設け、我ガ皇祖ノ靈、天ヨリ降鑿シテ朕ガ躬ヲ光シ助ク。今、諸虜已ニ平ラギ海内無事ナリ。以テ天神ヲ郊祀シ、用テ大孝ヲ申ブベキナリ。

と仰せられ、恭しく天祖を祭つて感謝の情を捧げられました。畢

竟、天祖の理想の幾部分を實現し得たことを報告して、悦んでいた
 だかうといふ御思召でありませう。

それより御歴代の天皇は、常に皇祖皇宗の御靈を祭つて、その雄
 大なる理想を體現せられました。が、明治天皇は明治三年正月神靈
 鎮祭の詔を宣せられて、

朕恭シク惟ルニ、大祖業ヲ創メ、神明ヲ崇敬シ、蒼生ヲ愛撫ス。
 祭政一致由ツテ來ル所遠シ。朕、寡弱ヲ以テ夙ニ聖緒ヲ承
 ケ、日夜怵惕シ、天職ノ或ハ虧ケンコトヲ懼ル。乃チ祇ミ、天
 神地祇、八神暨ビ列皇ノ神靈ヲ神祇官ニ鎮祭シ、以テ孝敬ヲ
 申ブ。

庶幾クハ、億兆ヲシテ矜式スル所アラシメン。
 と仰せられました。まことに有難き御聖旨であります。

今や日本國家は皇祖皇宗の御遺烈によつて、世界に重きをなし

て居りますが、我々は天祖肇國の理想を身にしめて、平和な明るい、
 親しみのある大度量の國民とならねばなりません。東洋文化の
 潮流と西洋文化の潮流とを綜合して、新たに世界文化の潮流を創
 造するのは、將來における日本國民の使命であり、天祖の大理想を
 實現する最も正しい道であります。故に益、奮勵して、この國家の
 道徳性を養ひ育て、世界的なる博愛を萬國に遍く光被せしむるや
 うに、お互に努めようではありませんか。

(日本文化史要に據る)

時代の概観

二四 上古の文學

敬神崇祖の民族が、皇室を中心として祭祀の庭に集り、祖先の歴史を語り、祖先の勳業をしのび、よりて以て團結せるは即ち我が建國の體裁なり。此の時未だ文字あらず、必ず口々に傳誦せられたる詩的美辭ありて、此の祭祀に伴ひしならむ。今尙延喜式中に保存せられたる祝詞は、即ち其の面影を止むるものといふべし。

祝詞

そもく、祝詞は、天皇即ち現つ神の命令によりて神祇に白す詞にして、常に國家の安穩、國民の幸福を求むるを主眼とす。祈年祭、神嘗祭、廣瀨大忌祭、龍田風神祭、いづれも年穀の豐饒ならんことを祈るものにして、大殿祭、御門祭、鎮火祭等は、天皇の宮殿、玉體に異變なく、安穩長久にましませとの祈なり。朝廷のみならず、朝廷に仕へ奉る百官人も亦恙く繁榮して、奉公し奉れと祈るなり。大祓詞

は、上下の人の一切の罪惡を祓ひ清むる祭にして、かくして年々に心を清淨にし、其の身を洗滌して、公に仕へ私を慎む。現在の福祉を求め、現世の生活を樂しむ國民の氣風は、皆祝詞の中に認むべく、支那印度の文明の感化未だあらはれざる敬神崇祖の上代思想は、能く祝詞の中に表彰せられたりといふべし。其の文や單純にして變化少きを以て、却つて純朴簡古の風あり。自ら莊重森嚴の感を與ふ。

單純なる抒情歌

上代の國民は、此の民族共通の文辭たる祝詞の外に、亦單純なる抒情歌を有したりき。記紀の二書を始めとして、古風土記等に萬葉假名を以て記載せられたるもの即ち是なり。いづれも内容は簡單にして、僅に直覺的情緒を述べたるに過ぎずと雖も、自然に對する憧憬最も深く、枕詞譬喩を用ひ、自然の推移を見ては直ちに人事を聯想し、人事の消長を見ては直ちに自然を想起し、人事と自然

と全く融合せるは、早く後世和歌の通有性を發揮せるものといふべく、風光秀麗なる山河の間に生育せられし我が國民の上古文學としては、當然の傾向なりといふべし。五七交錯の句形も未だ一定せず、句數も亦種々なりと雖も、五句三十一文字の短歌形の後世に流行すべき傾向は、早く既に認められざるにあらず。

三韓を経て輸入し來れる支那文明は、推古朝以後は直接に彼土より傳來する事となれり。萬葉集の和歌が其の形式に於て、間接・直接に支那文學の影響を蒙れるは、當然の結果といはざるべからず。

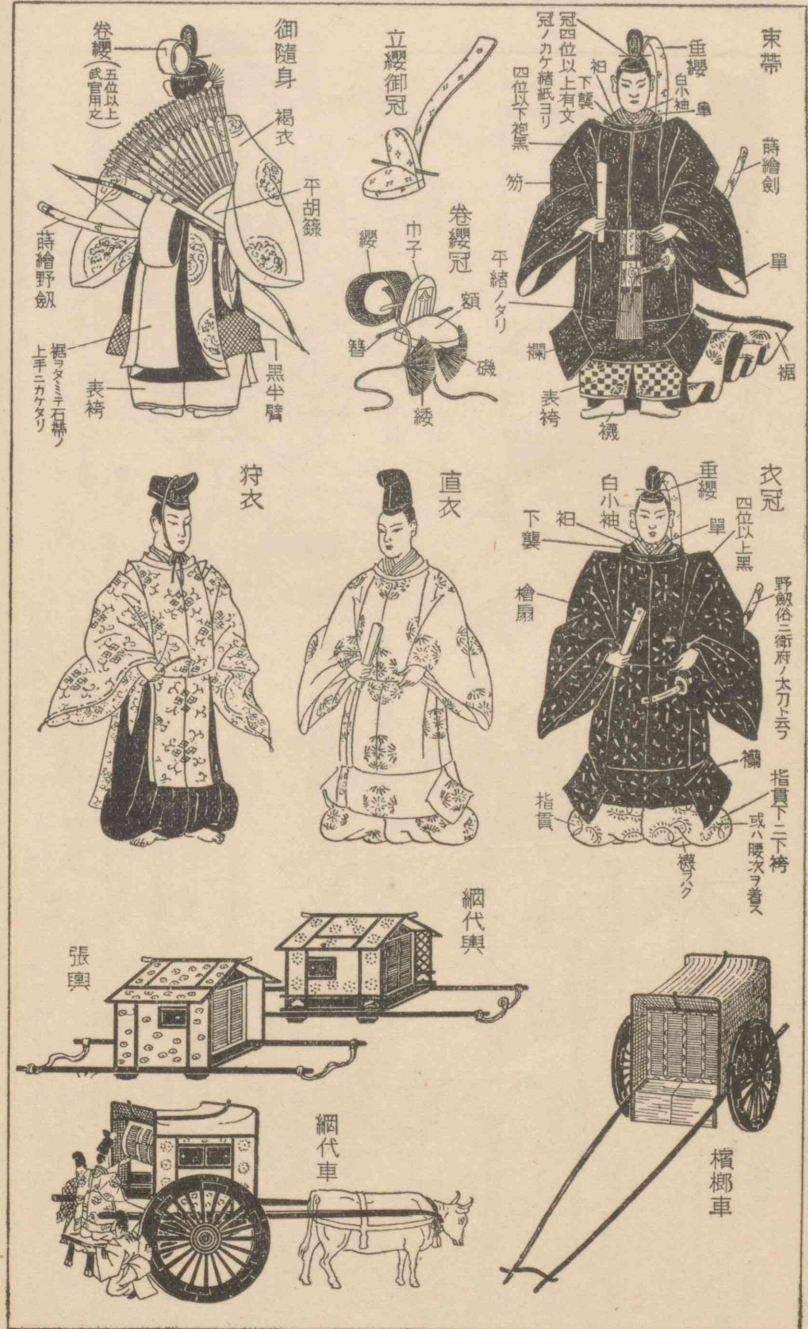
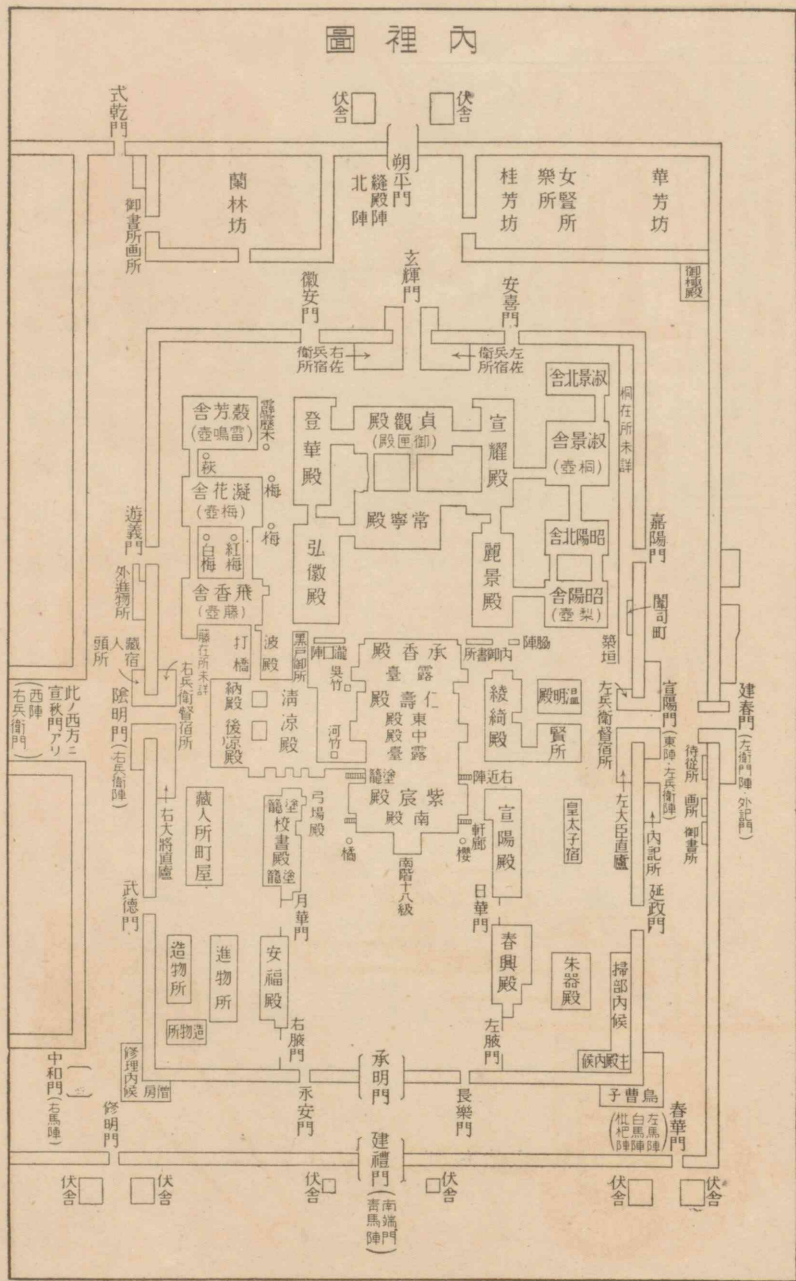
萬葉集は、短歌四千七百七十三首、長歌二百六十二首、旋頭歌六十一首の大歌集たり。其の中最も著しきは、柿本人麿等の歌ひ出せる長歌なりとす。柿本人麿・山邊赤人等は、純粹なる國民精神を歌へること多けれども、山上憶良に至りては、儒教・佛教等の思想を詠出

萬葉集

せるもの多し。要するに支那文化の影響を受けたる一般文運の進歩は、一方に於て純國文學の發達を促したるに外ならず。但し萬葉集中には、讀者知らざるの歌多し。多くは古來人口に膾炙せし歌什許りを集めたるものにして、眞に國民の聲といふべく、是等は支那文化の影響の外にあるを以て、却つて其の趣味の津々たるを覺ゆ。

古事記・風土記

古事記・風土記の文は純國文として見るべく、又續日本紀中に記されたる宣命の文は、祝詞と相對して同じく神聖莊嚴の古文たり。古事記・風土記は舊來の傳説を敘したれば、或は奈良朝以前の用語・句法をも、存したるべきか。宣命の文は莊嚴なれども、祝詞の如き簡古の趣なし。間、儒教の語を加へたるのみならず、思想に於ても其の影響自ら揭焉たるものあり。是等は皆實用の文字にして、國民の感情を歌へる散文は尙發達し得ざりしなり。(芳賀矢一氏の文に據る)

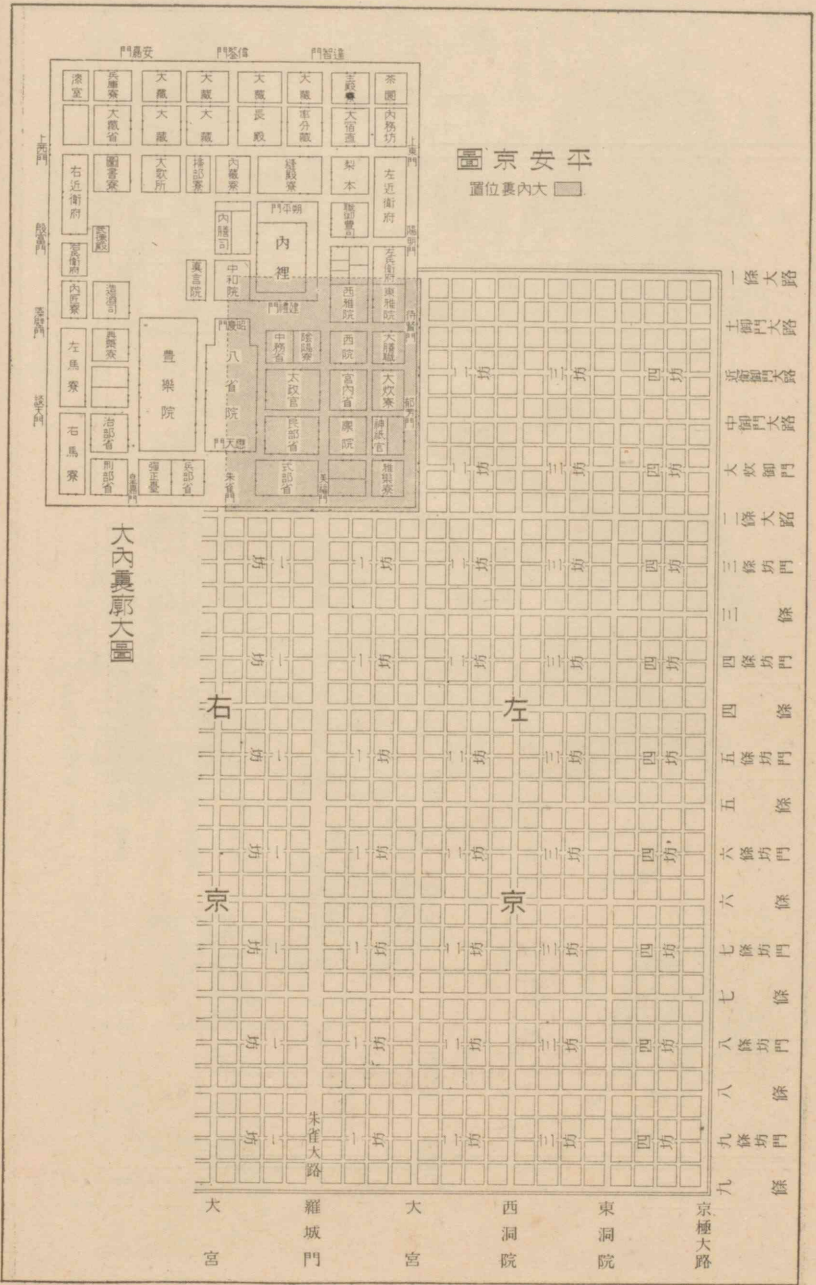
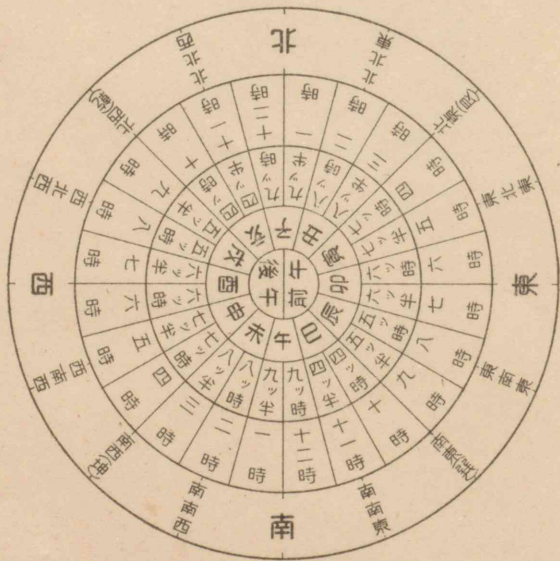


官職表

(大寶令を基としたるもの)

其他	官	方	地	察	警	官	武	八	太	神	官	職
藏人所	國司	大宰府	右京職	檢非違使	右馬寮	右兵衛府	右衛門府	彈正臺	省	政官	祇官	官等
頭	小大守	大帥	大夫	別當	頭	同	督	大將	卿	伯	長官	カ
五位	介	小大貳	亮	佐	助	同	佐	小中將	小大弼	小大副	次官	ク
六位	小大掾	小大監	進	尉	允	同	尉	小大將	小大丞	小大祐	判官	ク
	小大目	小大典	屬	小大志	小大屬	同	小大志	小大將	小大疏	小大錄	主典	ク

方位及及びの時圖



紛れ易き品詞(文語)

ね		らむ		なり				たり			語		
助完了動詞	助打動詞	時の助動詞 未來完了	助推量の助動詞	形容動詞の語尾	詠歎の助動詞	助動詞	助動詞	動詞	形容動詞の語尾	助動詞	時の助動詞 現在完了	種用法別	
とく行きね。	人こそ知らね。	生けらむ。	散るらむ。	山紫に水明らかなり。	蟲の聲すなり。	日はくるゝなり。	花の美しきなり。	彼は軍人なり。	事業愈なりぬ。	水洋々たり。	父父たり、子子たり。	花咲きたり。	用 例
ばや		な		なむ		ぬ		しか		語	種用法別	用 例	
問の助詞	條件と疑	助望の助詞	助感動詞	助完了動詞	助禁止動詞	係の助詞	助望の助詞	未來完了の助動詞	助打動詞	助完了動詞	過去の助動詞 と疑問の助詞	過去の助動詞	種用法別
心あてに折らばや折らむ。	心あらずば買ひぬ。	心あらむ人に見せばや。	知らじな。	花散りなば。	ゆめ忘るな。	花なむ咲く。	花咲かなむ。	花咲きなむ。	こぬをまつ。	花咲きぬ。	君はこの本をよみしか。	驚るゝまでこそ戦ひしか。	用 例

助詞の用法(文語)

禁止		反語		疑問		種用法別
な…そ	な	か	や	か	や	助詞
悪事をなせそ。	我をな忘れそ。	ゆめ忘るな。	唯か知らざらむ。	豈我のみならむや。	有るか無きか。	有りや無しや。
件		條		種用法別		助詞
確定		假定		種用法別		助詞
ば		と		と		助詞
波風止まねば同じところ	品よければ買ひぬ。	問へば答へ、問はざれば答へず。	繪にかくと筆も及ばず。	よろづよ經とも色はかはらじ。	急かざばぬれざらまし。	明日晴天ならば遠足せむ。

尾	接		語		頭		接		語
み	さ	へ	さま	ばら	たち	がた	ら	ども	ほの
青み。深み。	行くさ。歸るさ。	ゆくへ。片へ。	神様。	殿ばら。奴ばら。	親たち。公だち。	君がた。殿がた。	汝ら。我ら。	物ども。事ども。	ほの見ゆ。ほの暗し。
ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た
ま直中。ま心。	さ夜。さ迷ふ。	か弱し。か細し。	お顔。	み吉野。み空。	逸早し。	もの淋し。	生紙。生薬。	けうとし。け壓る。	た謀る。た走る。
彌	初	を	語	を川。を暗し。	うひ陣。うひ學び。	彌高し。彌増す。	第一。第二。	第一。第二。	た謀る。た走る。

紛れ易き品詞(文語)

ね		らむ		なり				たり			語							
助動詞	完了動詞	打動詞	消動詞	時助動詞	助動詞	推量詞	詠嘆詞	助動詞	指動詞	動詞	形容詞	指動詞	現在完了動詞	時助動詞	種用法別	用	例	
とく行きね。	人こそ知らね。	生けらむ。	散るらむ。	山紫に水明らかなり。	蟲の聲すなり。	日はくるゝなり。	花の美しきなり。	彼は軍人なり。	事業愈なりぬ。	水洋々たり。	父父たり、子子たり。	花咲きたり。	花咲きたり。					
ばや		な		なむ				ぬ			しか		語					
問の助詞	条件と疑	助望詞	助動詞	助動詞	完了動詞	禁止詞	係の助詞	助望詞	助望詞	助動詞	打動詞	完了動詞	過去の助動詞	過去の助動詞	種用法別	用	例	
心あてに折らばや折らむ。	心あらむ人に見せばや。	心あらむ人に見せばや。	知らじな。	花散りなば。	ゆめ忘るな。	花なむ咲く。	花咲かなむ。	花咲きなむ。	こぬをまつ。	花咲きぬ。	君はこの本をよみしか。	整るゝまでこそ戦ひしか。						

助詞の用法(文語)

願望		場所・方向		添加		外に含ま		重きを言		禁止		反語		疑問		種用法別	
なむ	ばや	へ	に	さへ	すら	だに	な…そ	な	か	や	か	や	か	や	助詞	用	例
世の汚をば知らであらなむ。	心あらむ人に見せばや。	前へ進め。	机によりかゝる。	梓弓おして春雨けふ降りぬあすさへ降らば若菜つみてむ。	我身すら容れられず。	思ふこと筆にだに残さばや。	悪事をなせそ。	我をな忘れそ。	ゆめ忘るな。	唯か知らざらむ。	豈我のみならむや。	有るか無きか。	有りや無しや。				
係結				件確定				條假定				種用法別					
こそ	なん	か	や	ぞ	ども	ど	ば	とも	と	ば				助詞	用	例	
人こそ見えぬ。	善くなむ見ゆる。	いづれかまされる。	花や散りし。	見てぞ思ふ。	見れども見えず。	美しけれどとげあり。	波風止まねば同じところにあり。	品よければ買ひぬ。	問へば答へ、問はざれば答へず。	急かざばぬれざらまし。	明日晴天ならば遠足せむ。	繪にかくと筆も及ばず。	よろづよ經とも色はかはらじ。				

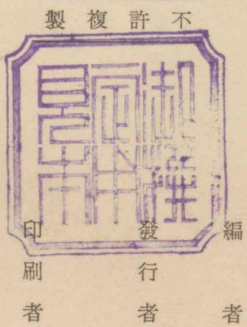
語尾												接頭																					
が	が	ら	ぶ	さ	ば	め	げ	み	さ	へ	さま	ば	たち	が	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を	語
がてら	がまし	らし	ぶる	さぶ	ばむ	めく	げ	み	さ	へ	さま	ばら	たち	がた	ら	ども	ほ	ひ	ま	さ	か	お	み	いち	もの	生	け	た	第	彌	初	を	用
散歩がてら。	ましがまし。隔てがまし。	男らし。女らし。	學者ぶる。	神さぶ。	けしきばむ。汗ばむ。	時めく。春めく。	にくげ。心ありげ。	青み。深み。	行くさ。歸るさ。	ゆくへ。片へ。	神様。	殿ばら。奴ばら。	親たち。公たち。	君がた。殿がた。	汝ら。我ら。	物ども。事ども。	ほの見ゆ。ほの暗し。	ひがめ。ひが事。	ま直中。ま心。	さ夜。さ迷ふ。	か弱し。か細し。	お顔。	み吉野。み空。	逸早し。	もの淋し。	生紙。生薬。	けうとし。け壓る。	た謀る。た走る。	第一。第二。	彌高し。彌増す。	うひ陣。うひ學び。	を川。を暗し。	例

昭和十二年七月廿六日 印刷
 昭和十二年七月卅一日 發行
 昭和十三年一月十日 修正再版印刷
 昭和十三年一月十五日 修正再版發行

新制國語讀本

定價 卷一—卷九 各六拾錢
 卷十 各五拾八錢

新東條國文



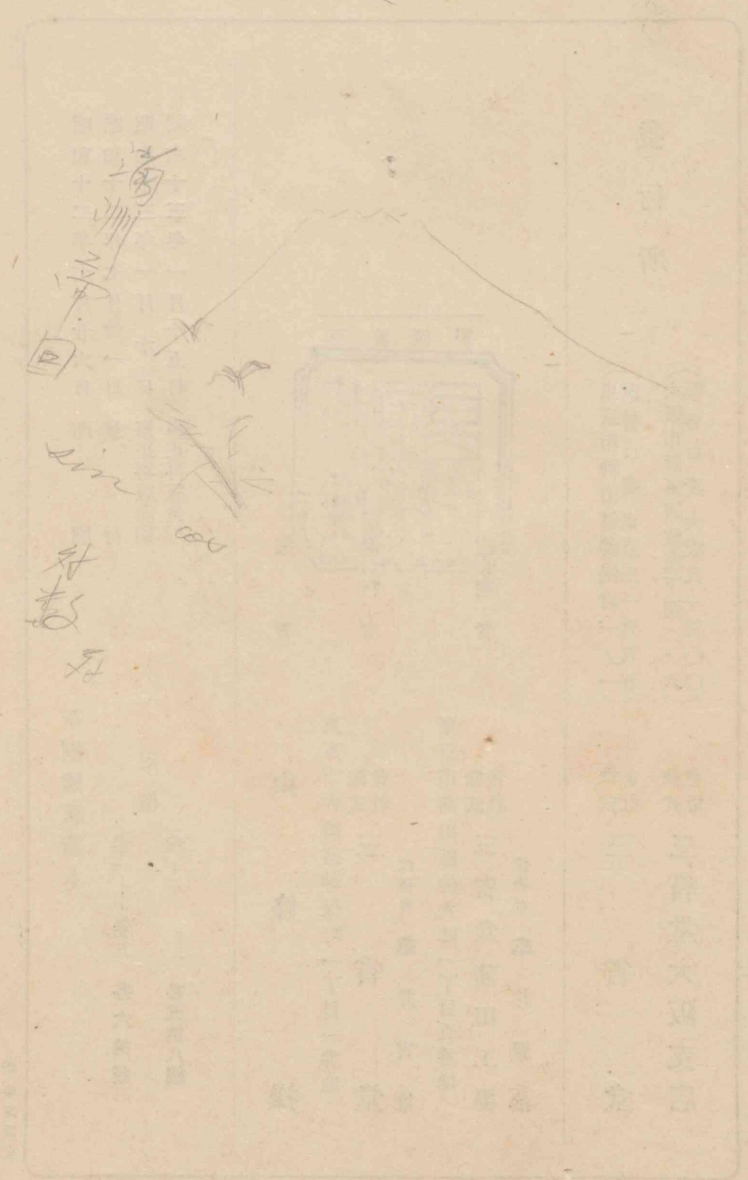
東條操
 東京市神田區神保町一丁目一番地
 株式會社 三省堂
 代表者 龜井寅雄
 東京市蒲田區仲六郷一丁目五番地
 株式會社 三省堂蒲田工場
 代表者 龜井豐治

發行所

(東京市神田區神保町一ノ五ノ一)
 振替口座 東京三一五五五
 (大阪市西區阿波座下通二ノ六)
 振替口座 大阪八一三〇〇六

株式會社 三省堂
 株式會社 三省堂大阪支店

何月... 何月... 何月...



Handwritten notes and symbols on the left side of the diagram, including the word 'sin' and some numbers.

Vertical text on the right side of the diagram, possibly describing the building or the drawing.

第一章 紐五卷

谷

口

孝

五